

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第143集

大里郡寄居町

桜さくら 沢ざわ 窯 跡

寄居地区集団設置建物建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

1994

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



第1・2号窟跡全景(上)
第2号窟跡遺物出土状況(下)

序

埼玉県の北西部に位置する寄居町は、古代武蔵国の四大須恵器窯跡群の一つである末野窯跡群をはじめ、古くからの遺跡が数多く知られております。とりわけ当地域を東流する荒川を挟んだ南北の段丘面上には、古墳時代後期の群集墳として知られる小前田古墳群、県内有数の古代寺院である馬騎の内廃寺、戦国時代にあつては後北条氏の関東支配のかなめの一つであつた鉢形城などが存在しています。これらの遺跡はこの地域が豊かな環境のもとに古くから人々の生活が営まれていたことのあらわれといえましょう。

このたび、寄居町桜沢において、環境事業团による寄居地区集団設置建物建設事業が実施されることになり、事業地内の遺跡の取り扱いについて関係機関による協議が重ねられた結果、当事業团が発掘調査を実施し、その記録を保存することになりました。

調査の結果、平安時代の須恵器の窯跡が発見され、末野窯跡群が東へ大きく離れた桜沢地区まで及び、予想外に大規模なことがわかつたほか、窯跡からは当時の日用品であつた食器類の生産状況を知るうえで貴重な資料を得ることができました。

本書はこれらの成果をまとめたものです。調査成果が学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及及び教育機関の参考資料として広く御活用いただけることを願つてやみません。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで多大な御協力を賜りました教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、環境事業团、寄居町教育委員会並びに地元関係各位、発掘整理作業に携われた方々に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業团
理事長 荒井 桂

例 言

1. 本書は、埼玉県大里郡寄居町大字桜沢字石神1595番地他に所在する桜沢窯跡の発掘調査報告書である。

文化庁指示通知は、平成4年6月11日付委保第5—660号である。遺跡略号はSKRZWである。

2. 発掘調査は、寄居地区集団設置建物建設に伴う事前調査である。埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整のもとに、環境事業団の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
3. 発掘調査は、平成4年4月1日～平成4年6月30日まで実施した。報告書刊行事業は、平成5年10月1日～平成6年3月31日まで実施した。発掘調査及び整理・報告書刊行事業の組織は、第I章に記した。
4. 分析については、下記へ委託した。

土器胎土分析 第四紀地質研究所

5. 本書の執筆は昼間孝志が行ったが、第I章—1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、第IV章—6を細田勝が行った。
6. 本書に関する図版作成及び写真撮影は、下記の者が行った。

発掘調査における写真撮影 石坂俊郎・昼間

図版作成及び遺物写真撮影 昼間

7. 本書の編集は、資料部資料整理第二課の昼間が行った。
8. 本書に掲載した資料は、平成6年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
9. 本書の作成に際し、下記の方々からご教示・ご協力を賜った。(敬称略)

有吉重蔵 今関久夫 木津博明 須田 勉 篠原祐一 長瀧歳康 服部敬史 森下昌一郎
山路直充 渡辺 一 寄居町教育委員会 花園町教育委員会

凡 例

本書における挿図の指示は以下のとおりである。

- 1 遺構番号は発掘調査時と同じであるが、断面図及びエレヴェーションの記載は一部変更してある。
- 2 挿図中に示す遺構表記の略号は、以下のとおりである。
S F……竪跡 S D……溝跡
- 3 遺跡全体図におけるX・Y表示は、国家標準直角座標第IV系に基づく座標値を示し、方位はすべて座標北を示している。
- 4 挿図の縮尺は、竪跡1/60・1/120、溝跡1/80・1/120、遺跡全体図1/200、遺物実測図1/4を原則とするが、一部例外もある。
- 5 遺構図中に示したドットは遺物の出土位置を示し、ドットと線を結んだ番号はその接合関係を示している。また、番号は遺物実測図中のそれと一致する。
- 6 遺物観察表の凡例は、以下のとおりである。

法量の（ ）内の数値は復元推定値で、単位はcmである。なお、平瓦の布目の本数は3×3cmに占める数値である。

また、土器に含まれる餛物を示す胎土については、以下のとおりである。

- A 砂粒（粗）、B 砂粒（細）、C 白色粒子、D 黒色粒子、E 石英、F 長石、G 片岩、H 鉄分、
I 小礫

焼成段階については、以下のとおりである。

- A 良好（硬く焼きしまり、遺物の断面に焼成斑がない製品）
B 普通（硬く焼きしまっているが、一部に赤みがかった製品も含まれる）
C 不良（焼成温度が上がらず、軟質の製品）

色調は、農林省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準拠した。

残存率については5%毎に記したが、実測図中に示した部位に対する比率であり、完形品もしくは準ずるもの以外は、遺物全体に占める割合を指すものではない。なお、平瓦については1%毎に記した。

圖のスクリーントーン部分は被熱部分を表す。

目 次

口絵

序

例 言

凡 例

目 次

I 発掘調査の概要	1
1. 発掘調査に至る経過	1
2. 発掘調査・報告書刊行事業の組織	2
3. 発掘調査・報告書刊行の経過	2
II 立地と環境	3
III 遺跡と概観	7
IV 遺構と遺物	9
1. 第1号窯跡	9
2. 第2号窯跡	20
3. 遺物の分布について	39
4. 第1号溝跡	41
5. 第2号溝跡	44
6. グリッド出土遺物	45
V 結語	46
桜沢窯跡の出土遺物について	46
1. 器種構成	46
2. 出土土器について	48
3. 文字瓦「上」の逆字について	51
附編	55
桜沢窯跡出土土器の胎土分析について	55

挿 図 目 次

第1図	桜沢窯跡と周辺の遺跡	4	第21図	第2号窯跡出土遺物(6)	32
第2図	桜沢窯跡全体図	8	第22図	第2号窯跡平瓦分布図	33
第3図	第1号窯跡	10	第23図	第2号窯跡出土遺物(7)	34
第4図	第1号窯跡遺物出土状況図	11	第24図	第2号窯跡出土遺物(8)	35
第5図	第1号窯跡出土遺物(1)	12	第25図	第2号窯跡出土遺物(9)	36
第6図	第1号窯跡出土遺物(2)	13	第26図	第2号窯跡出土遺物(10)	37
第7図	第1号窯跡出土遺物(3)	15	第27図	須恵器分布図	39
第8図	第1号窯跡平瓦分布図	16	第28図	平瓦分布図と第1号・2号溝跡	40
第9図	第1号窯跡出土遺物(4)	17	第29図	第1号溝跡出土遺物(1)	41
第10図	第1号窯跡出土遺物(5)	18	第30図	第1号溝跡出土遺物(2)	42
第11図	第1号窯跡出土遺物(6)	19	第31図	第1号溝跡出土遺物(3)	43
第12図	第2号窯跡	21	第32図	第2号溝跡出土遺物	44
第13図	第2号窯跡遺物出土状況図(1)	22	第33図	桜沢窯跡グリッド出土遺物	45
第14図	第2号窯跡遺物出土状況図(2)	23	第34図	器種別比率	47
第15図	第2号窯跡遺物出土状況図(3)	24	第35図	桜沢窯跡出土遺物	49
第16図	第2号窯跡出土遺物(1)	25	第36図	主な窯跡・集落出土遺物	50
第17図	第2号窯跡出土遺物(2)	26	第37図	文字瓦「上」1-4武蔵国分寺-5-8桜沢窯跡	53
第18図	第2号窯跡出土遺物(3)	28	第38図	分析資料(1)1-5桜沢遺跡-6-10中壘遺跡-13吉野庵寺	56
第19図	第2号窯跡出土遺物(4)	29	第39図	分析資料(2)台耕地遺跡	57
第20図	第2号窯跡出土遺物(5)	30	第40図	Qt-Pl-SiO ₂ -Al ₂ O ₃ -SiO ₂ -Fe ₂ O ₃ 図	59

表 目 次

第1表	桜沢窯跡胎土性状表	61
-----	-----------	----

写真図版目次

図版1	桜沢窯跡全景	図版4	第1号窯跡断ち割り状況
	第1号・第2号窯跡遺物出土状況		第2号窯跡遺物出土状況
図版2	第1号窯跡・第2号窯跡完掘状況	図版5	第2号窯跡窯体断面
	第1号窯跡遺物出土状況		第2号窯跡灰原断面
図版3	第1号窯跡遺物出土状況	図版6	第2号窯跡灰原遺物出土状況
	第1号窯跡		第2号窯跡遺物出土状況(西から・左)

- 図版6 第2号窯跡遺物出土状況(東から・右)
- 図版7 第2号窯跡焼成部遺物出土状況
第2号窯跡煙道部付近遺物出土状況
- 図版8 第2号窯跡焼成部遺物出土状況
第2号窯跡全景(北から)
- 図版9 第2号窯跡燃烧部付近遺物出土状況
第2号窯跡完掘状況
第2号窯跡灰原完掘状況
- 図版10 桜沢窯跡調査風景(左)
第1号溝跡(手前)・第2号溝跡
桜沢窯跡全景
- 図版11 第1号窯跡—4 第1号窯跡—5
第1号窯跡—6 第1号窯跡—8
第1号窯跡—10 第1号窯跡—15
第1号窯跡—18 第1号窯跡—19
第1号窯跡—40 第1号窯跡—42
第1号窯跡—43 第1号窯跡—45

- 図版12 第2号窯跡—1 第2号窯跡—2
第2号窯跡—3 第2号窯跡—4
第2号窯跡—9 第2号窯跡—10
第2号窯跡—12 第2号窯跡—15
第2号窯跡—18 第2号窯跡—19
第2号窯跡—21 第2号窯跡—22
- 図版13 第2号窯跡—23 第2号窯跡—26
第2号窯跡—27 第2号窯跡—30
第2号窯跡—51 第2号窯跡—54
第2号窯跡—56 第2号窯跡—57
第2号窯跡—69 第2号窯跡—71
第2号窯跡—109 第2号窯跡—110
- 図版14 第2号窯跡—136 第2号窯跡—103
第2号窯跡—135
- 図版15 第1号窯跡—66 第1号窯跡—52
第2号窯跡—23 第2号窯跡—51

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

本県は、東京都に隣接するという位置的な関係から、首都圏への業務機能等の集中とそれに伴う人口流入により急激な都市化を経験しており、住宅地域と工場や事業場の混在による公害問題が浮上している。こうした問題の解決には、工場・事業場を適地に移転・集約化し公害防止を図るとともに、企業の合理化、近代化を促進する必要がある。しかし、産業集中地域における公害問題については、企業の努力だけでは解決することが困難な場合が多い。埼玉県では、こうした状況に対応し、さまざまな環境政策を実施しているところである。

大里郡寄居町大字桜沢地内に、公害防止事業団（平成5年度から環境事業団）により寄居地区集団設置建物建設が計画されたのも同様の主旨による。

同集団設置建物建設事業の計画にあたり、平成3年11月19日付け3公業第931号で公害防止事業団理事長から埼玉県知事あて「寄居地区集団設置建物建設事業実施計画について」協議があり、それを受けて平成3年11月22日付け環管第788号で環境部環境管理課長から教育局文化財保護課長あて同内容の照会があった。文化財保護課では、平成3年11月27日付け教文第939号をもって、文化財保護課長から環境管理課長あて「周知の埋蔵文化財は所在しないが、事前に当課及び町教育委員会と協議のうえ、所在確認調査を実施すること」と回答した。

それを受けて、公害防止事業団の依頼による所在確認調査の結果が、平成3年12月12日付け3寄教発第4217号で寄居町教育委員会教育長から埼玉県教育委員会教育長あてに、次のとおり報告された。

- 1 寄居地区集団設置建物建設事業予定地内には平安時代の窯跡が所在する。
- 2 遺構の検出された区域は開発予定地から除外し、現状保存することが望ましい。やむを得ず現状変更する場合には、文化財保護法第57条2項の規定により、事前に文化庁長官へ埋蔵文化財発掘届を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

その後、取り扱いについて文化財保護課と公害防止事業団において協議を重ねたが、その建設事業の主旨、必要性等から記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団を実施機関と定め、同事業団、公害防止事業団、文化財保護課の三者により、調査方法、調査期間、調査経費等について協議を重ね、平成4年4月1日から調査を開始することが決定された。

続いて、埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から文化財保護法第57条1項に基づく埋蔵文化財発掘調査届が平成4年3月11日付け財理文第848号で文化庁長官あて提出され、文化庁から平成4年6月11日付け委保第5-660号で受理通知があった。

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書刊行事業の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(a) 発掘調査 (平成4年度)

理 事 長	荒 井 修 二
副 理 事 長	早 川 智 明
常 務 管 理 部 長	倉 持 悦 夫
管 理 部	
庶 務 課 長	萩 原 和 夫
主 査	賢 田 清
主 事	菊 池 久
経 理 課 長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 事	長 瀧 美 智 子
主 事	福 田 昭 美
主 事	腰 塚 雄 二
調 査 部	
理 事 兼 調 査 部 長	栗 原 文 藏
副 部 長	梅 沢 太 久 夫
調 査 第 一 課 長	宮 崎 朝 雄
主 任 調 査 員	昼 間 孝 志
主 任 調 査 員	石 坂 俊 郎

(b) 報告書刊行事業 (平成5年度)

理 事 長	荒 井 桂
副 理 事 長	富 田 真 也
専 務 管 理 部 長	横 川 好 富 生
常 務 管 理 部	柴 崎 光
管 理 部	
庶 務 課 長	萩 原 和 夫
主 査	賢 田 清
主 事	菊 池 久
経 理 課 長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 事	長 瀧 美 智 子
主 事	福 田 昭 美
主 事	腰 塚 雄 二
資 料 部	
資 料 部 長	小 川 良 祐
副 部 長	谷 井 彪
兼 資 料 整 理 第 一 課 長	小 久 保 徹
兼 資 料 整 理 第 二 課 長	昼 間 孝 志
主 任 調 査 員	昼 間 孝 志

3. 発掘調査・報告書刊行の経過

桜沢竈跡の調査は、平成4年4月1日から平成4年6月30日まで3ヵ月間にわたって実施された。調査対象面積は、ほぼ30m四方にあたる900㎡である。調査区は比較的平坦で、西側に僅かに浅い谷が入る。調査は4月、表土剥ぎ・遺構確認調査を行い、2基の須臾器竈跡と2条の溝跡を検出した。同下旬、基準点測量を行い、1号溝より本格的な調査に着手する。5月、1号溝と併行して、1号竈、2号竈の調査に着手する。1号竈は比較的小規模であったが、竈の構築過程で主軸方位を北東に変更していることが確認できた。2号竈は遺物の出土状況から1号竈廃絶直後に構築したとみられ、1号竈と同じ器種の土器を焼成していたことが判明した。6月、2号竈の灰原の広がりと2号溝の調査に入る。同中旬～下旬、すべての遺構を完掘し、遺構の実測、航空写真撮影等を行い、調査は終了した。

桜沢竈跡の整理・報告書刊行事業は、平成5年10月1日から平成6年3月31日まで6ヵ月実施された。10月、出土遺物の水洗い、注記、復元作業を行う。併せて、遺構図の整理・第二次原因の作成を行う。10月末より遺物実測を開始し、遺構図及び遺物実測図は順次トレースを進める。11月、遺物実測及びトレース終了。12月上旬、遺構図・遺物版組・遺物写真撮影。中旬～下旬、原稿執筆・割り付け・編集作業。1月、入札。2～3月、校正・報告書の刊行。

II 立地と環境

桜沢竈跡は、埼玉県大里郡寄居町大字桜沢字石神1595番地他に所在し、秩父鉄道小前田駅の南西約600mの地点に位置する。遺跡は、荒川左岸の標高約90mの平坦な中段段丘面に立地する。この段丘面は寄居町岩崎付近から川本町にかけては、比較的平坦な地形が連続するが、1kmあたり約5mの傾斜があり、実際には肉眼で見ると勾配は急である。また、段丘面上には、いたるところに浅い谷地形が見られ、旧河道の一部とされる。

荒川は、甲武信岳にその水源を発し、三峰口に至る23kmの間に2200m余りの比高差をもたらし、長瀬に至るまでの約15km間は、急流による侵食で深い谷が形成し、美しい景勝地をつくり出している。その流れは、寄居町矢那瀬から立ヶ瀬付近にかけて大きく屈曲した後、川幅を広げて次第に緩やかになり、川本町から熊谷市にかけての広大な扇状地を形成している。こうした扇状地や河岸段丘面には、荒川の侵食による砂礫層が厚く堆積し、特に扇状地の扇端付近での湧水点の発達を促している。

本稿では、桜沢竈跡の年代や性格的な面などから、末野竈跡群を含め、後期古墳群と奈良・平安時代の集落、生産遺跡を中心に概観する。

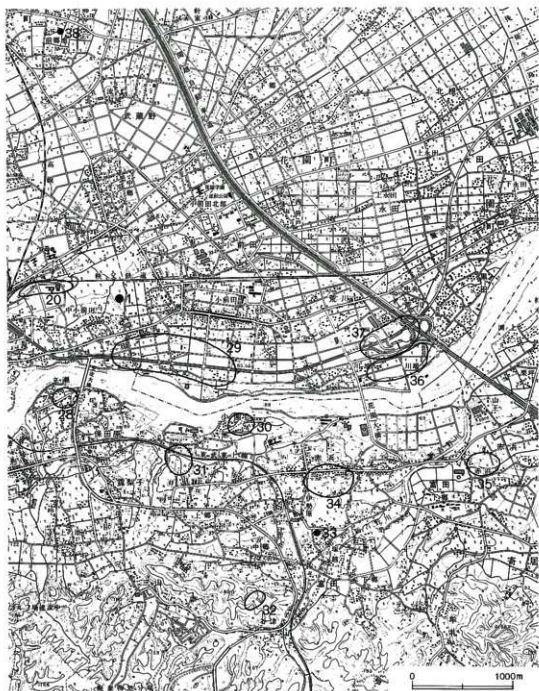
周辺の遺跡をみると、河岸段丘面上に営まれている場合が多く、特に中段段丘面上は縄文時代前期頃より進出が目立つようになり、前期から後期にかけて大規模な集落が形成されている（上南原遺跡、下南原遺跡、台耕地遺跡、樋下遺跡、南大塚遺跡、甘粕原遺跡、日向遺跡、北塚屋遺跡）。弥生時代の遺跡は検出率が少なく（用土・平遺跡）、集落などの詳細は不明な点が多い。古墳時代には台耕地遺跡、むじな塚遺跡、中芝遺跡、南藤田遺跡などの集落跡が散見するが、遺跡数は比較的少ない。これに対して、古墳群は後期を中心に荒川の対岸に累々と築造されている。小前田古墳群、鹿島古墳群などをはじめ、大規模なものが多い。集落については古墳群の立地を考えると、古墳群よりは段丘面の中心部寄りに営まれていた可能性があるが、寄居町周辺の集落遺跡は現時点では殆ど明らかにされていない。

周辺の古墳群は、荒川左岸では藤田古墳群、小前田古墳群、右岸では上郷古墳群などがあげられる。古墳群の大半は、後世の耕作や開発によって墳丘等の旧状を留めていないのが現状であるが、表採や調査によって出土した遺物により6世紀前半から7世紀中葉の築造年代が考えられている。荒川流域の中でも有力な古墳群である小前田古墳群は、かつては100基以上存在したとみられ、18基の古墳と5基の箱式石棺が調査された。調査の結果、1基の前方後円墳を含む15基の墳形が明らかにされ、古墳群は時期が新しくなるにつれて高位段丘面から低位段丘面に築造されるようになったことが確認された。また、1号墳出土の須恵器は、末野竈跡群との関係が指摘されている（瀧瀬・1986）。黒田古墳群は、20基余りの古墳からなり、前方後円墳一基を含む15基が調査された。主体部が確認できたものはいずれも横穴式石室で、無袖が8基、片袖が1基、同張りが2基検出された。出土した須恵器については、小前田1号墳と同様、末野竈跡群との関係が考えられている。荒川右岸やその周辺の古墳群については、10～20基余りで構成されたものとみられ、表採遺物からその築造年代は6世紀後半から7世紀代が考えられている。しかし、これらの古墳群は実際に発掘調査さ



第1図 桜沢窟跡と周辺の遺跡

1. 桜沢窟跡 2. 吉野庵寺 3. 末野窟跡群第15支群 4. 末野窟跡群第16支群 5. 馬騎の内庵寺 6. 末野窟跡群第6支群 7. 末野窟跡群第4支群 8. 末野窟跡群第3支群 9. 末野窟跡群第2支群 10. 城見上遺跡 11. 城見上遺跡 12. 末野遺跡 13. 末野遺跡 14. 末野窟跡群第5支群 15. 末野窟跡群第7支群 16. 末野窟跡群第8支群 17. 末野窟跡群第10支群 18. 末野窟跡群第11支群 19. 末野窟跡群第13支群



20. 末野窟跡群第14支群 21. 末野窟跡群第12支群 22. 末野窟跡群第9支群 23. 藤田古墳群 24. 寄居庵寺 25. 折原窟跡 26. 末野窟跡群第17支群 27. 樋ノ下遺跡 28. 立ヶ瀬古墳群 29. 小前田古墳群 30. 小園古墳群 31. 上郷古墳群 32. 末野窟跡群第18支群 33. 東伴場地遺跡 34. 伊勢原古墳群 35. 赤浜古墳群 36. 黒田古墳群 37. 台餅地遺跡 38. 東大塚遺跡(11・12は寄居町教育委員会、10・13は当事業団で調査)

れた例がなく、不明な点が多いが、今後の調査の成果次第では、末野窯跡群との関連性や古墳群の築造期間が大きく変わることも十分予想できる。

周辺の寺院跡は、3ヶ所確認されている。いずれも荒川左岸の丘陵や段丘面に立地する。馬騎の内廃寺は、鐘撞堂山の南尾根上に位置し、出土した素弁10葉軒丸瓦から7世紀後半の創建年代が考えられている。馬騎の内廃寺の8世紀代の瓦の中には、須恵器工人が使用する青海波文のある平瓦や須恵器作りの製作技法が用いられている点から、須恵器工人が造瓦体制に深くかかわっていたものと考えられている。また、同廃寺には平場と称する平坦な面が16ヶ所存在し、小規模な僧坊跡群が想定されている。馬騎の内廃寺の北側の尾根には吉野廃寺がある。細長い尾根上に造営されたとみられ、平安時代の平瓦が採集されているが、詳細は不明である。寄居廃寺は荒川左岸の河岸段丘面に位置し、小学校建設に伴う調査で奈良時代から平安時代の瓦が出土している。吉野廃寺と寄居廃寺の瓦には赤褐色したものが多く、当時この種の瓦は埼玉県北部地域と群馬県西部地域に多くみられ、この地域の瓦生産技術が一貫したものであったことを窺わせる。

末野窯跡群は荒川左岸の丘陵地帯を主体に分布し、19支群90基以上の窯の存在が確認された。窯跡群の主体は、円良田湖周辺の谷筋や丘陵南斜面に密集している。分布調査による窯跡群の中心的な操業年代は9世紀代であるが、第1支群Aの採集遺物の中には、その後調査された城見上遺跡で検出された7世紀末の住居内の須恵器の組合せと一致するものがある。発見例は少ないが、末野窯跡群の操業開始は最近の調査例をふまえると、城見土遺跡の須恵器などより更に百年余りは遡る可能性がある。荒川右岸では、2支群が確認され、折原窯跡では、2基の須恵器窯が検出された。出土遺物から10世紀前半と考えられ、高台付坏を主体に生産されている。この時期の窯跡は桜沢窯跡も含め、丘陵部から分散する傾向がみられ、窯構造や生産規模の縮小化とともに確実に須恵器生産が衰退期に向かっていることが窺われる。集落遺跡は城見上遺跡、樋ノ下遺跡、台耕地遺跡などがあげられる。樋ノ下遺跡、台耕地遺跡は、9世紀から10世紀中葉にかけての集落である。出土する須恵器は、末野産とみられ、胎土や製作技法に類似性はあるが、同一ではなく支群の中で微妙に異なっている。これは時代が新しくなるとともに主体となる生産地の分散が促され、古代的生産体制の遊離が進んだことを窺わせるものとして興味深い。

引用・参考文献

- 井上 肇他(1993)「寄居町末野遺跡の瓦製作工房住居の調査」第26回遺跡発掘調査報告会発表要旨 埼玉考古学会
埼玉県 (1987)「荒川」自然編 荒川総合調査報告書Ⅰ
酒井 清治他(1984)「台耕地(Ⅱ)」(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第33集
高橋 一夫他(1982)「埼玉県古代寺院跡調査報告書」 埼玉県史編さん室
瀧瀬 芳之 (1987)「小前田古墳群」(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第68集
谷井 彪他(1987)「埼玉の古代窯業調査報告書」 埼玉県立歴史資料館
中島 利治他(1984)「寄居町史」原始・古代・中世資料編 寄居町教育委員会
細田 勝 (1993)「寄居町樋ノ下遺跡の調査」第26回遺跡発掘調査報告会発表要旨 埼玉考古学会

Ⅲ 遺跡の概観

桜沢窯跡は荒川左岸、標高約90mの中位段丘面上に立地する。段丘面上には旧河道であった浅い谷地形が見られ、桜沢周辺では現荒川の流れる南東方向から丘陵方向に向かって谷が入る。現在、付近の谷地形は水田面として、平坦な地形の広がる谷の兩岸は桑畑として利用されているが、耕作土下には荒川の侵食による砂礫層が厚く堆積し、周囲には直径数cmから10cm余りの礫がいたるところに露出している。

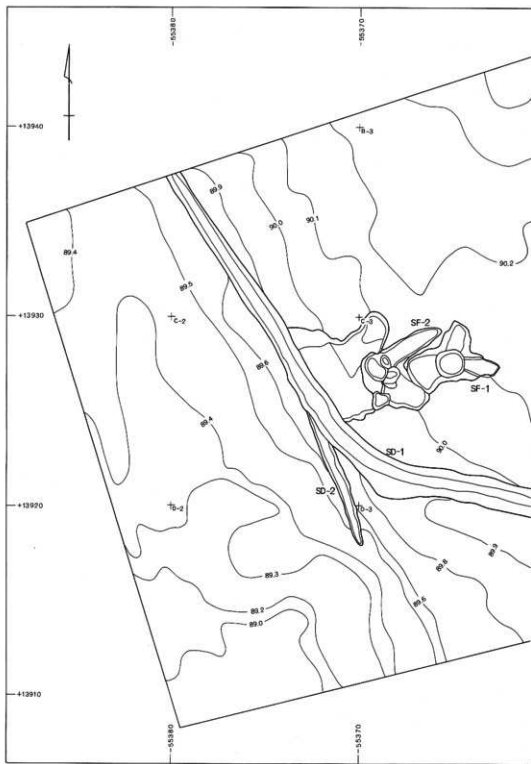
調査区は、平安時代の窯跡が確認された地域を中心に約30m四方の900㎡を対象とし、10m×10mのグリッドを設定して、調査を進めた。調査の結果、2基の須恵器窯跡と2条の溝跡が検出された。須恵器窯跡は調査区の中央部に位置し、遺物は、調査区の西側に入る谷の方向に広がっていることが確認でき、主に2基の窯跡と灰原、1号溝の大きく屈曲する区域に集中していた。1号溝の堆積は、窯跡内のそれと同様であり、特に人為的な掘り込みもないことからほぼ同時期の遺構であると判断した。

窯跡はともに半地下式の登り窯で、小規模である。窯は構築にあたって、円形の土坑を1m余り掘り、土坑の底面付近から緩やかな傾斜をつけて窯体を掘り込んでいったものとみられる。1号窯ははじめに北方向に掘り進むが、礫層に突き当たったため、約90°東に主軸を振り、再構築している。窯体の天井部は側壁の残存状況からみると、予想以上に低い。焚口付近で1m余り、煙道部付近で30cmほどの高さが考えられる。したがって窯体内の温度は高温には至らず、酸化している部分が多い。出土遺物は須恵器坏、高台付坏、皿、平瓦であった。窯の埋没時の出土状態からは、坏・高台付坏・皿を主に焼成していたものと考えられ、一部の高台付坏、平瓦は焼台に使用されている。

2号窯は1号窯の北西後方に礫層に平行して構築されている。窯の構築方法は1号窯と同じで、窯体の長さや天井部の高さを拡大している。主軸は1号窯よりやや北に振れるが、焼成部から煙道部は礫層にあたる為かやや傾斜角が急である。出土遺物は須恵器坏、高台付坏、皿、長頸壺、長頸瓶、平瓦である。遺物は1号窯と同様高台付坏と平瓦を焼台にし、坏、高台付坏、皿などを焼成している。遺物の出土状況から数回の操業が行われ、出土遺物や窯壁の還元化の状況からも1号窯に比べて窯状態は良好であったことが窺われる。また、出入り口は1号窯で使用された部分を2号窯でも使用し、更に新たに出入り口を設け、一部は操業時において灰原となっていた可能性がある。

窯跡の構築順は1号窯→2号窯と変遷するが、ともに天井部の崩落によって廃絶に至っている。また、灰層は各窯の前庭部と1号溝に集中し、周囲には分散しないことから人為的な埋戻しや周囲に積まれたものが操業終了以後短期間に流れ込んだものとみられる。

1号溝は調査区の南東から北西部に向かって緩やかに傾斜し、南東隅と窯の灰原になっている部分で大きく屈曲する。主に遺物は灰原の部分に集中し、窯の遺物以外は見られない。2号溝は1号溝の大きく屈曲する部分から谷地形と平行する。確認面から5cmほどの浅い掘り込みで、次第に谷中に入る。遺物は1号溝と接する付近に認められるが、出土量は少ない。また、1号溝と2号溝の重複する部分の新旧は確認できなかった。



第2图 桜沢集跡全体图

IV 遺構と出土遺物

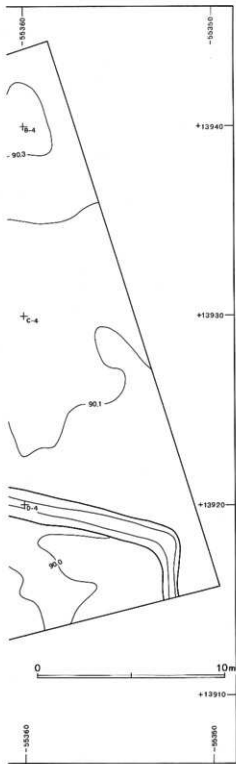
1. 第1号窯跡(第3図)

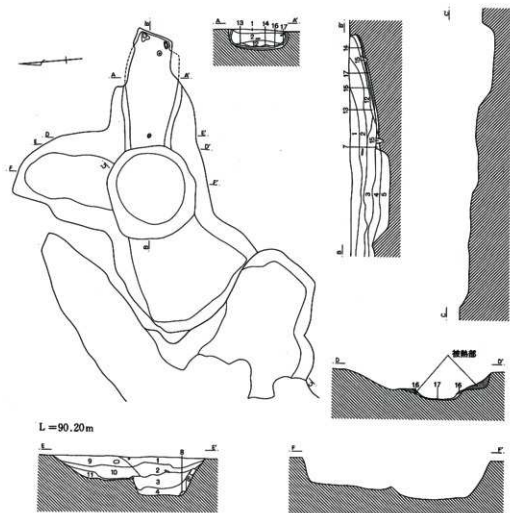
C-3グリッドに位置する。主軸はE-10°-Sを指す。窯の規模は長軸3.35m、最大幅0.9mである。窯は当初前庭部となる円形の土坑を1m余り掘り、N-13°-Eの主軸方位に向けて構築されるが、1.5m程で北側に広がる礫層に突き当たり、約80°東に主軸を振り再構築を図っている。窯は遺構確認時に、窯尻付近の窯壁がにぶい赤褐色に露出しており、前庭部付近まで黒褐色～暗灰褐色の灰層の広がりが確認された。遺物の分布は窯体内に集中し、出入口付近や周辺への分布は殆ど見られなかった(第27図参照)。窯の焼成は残存状況から判断すると、1度または操業途中で天井部及び燃焼部付近の窯壁の崩落によって中断された可能性がある。出土遺物は、坏、高台付坏、皿、長頸壺、平瓦で、高台付坏と平瓦は焼台としても使用されていた。また、窯に伴う排水溝やピットは検出されなかった。

窯構造

1号窯の構築は前庭部として直径約1.5mの土坑を1m程掘り、次に窯本体となる部分を溝状に掘りぬき、アーチ状の天井を架け、さらに掘削時の排土などで覆ったものである。焼成部の傾斜角は約8°である。

前庭部には黒褐色土を基調とする小礫、炭化物、焼土を含む層が堆積するが、2号窯に比較すると少なく、焚口付近の窯壁が崩落したとみられる焼土ブロックや窯構築を途中で止めた際に排出された小礫が多く混入している。土層の堆積や遺物の分布から構築時の排土や窯体内から掻きだされた灰は、周辺に積まれた状態にあったと考えられる。窯の底面は平坦で、掘り込み時にローム面まで達し、窯と反対側の出入口部へは階段状の緩やかな傾斜をもつ。



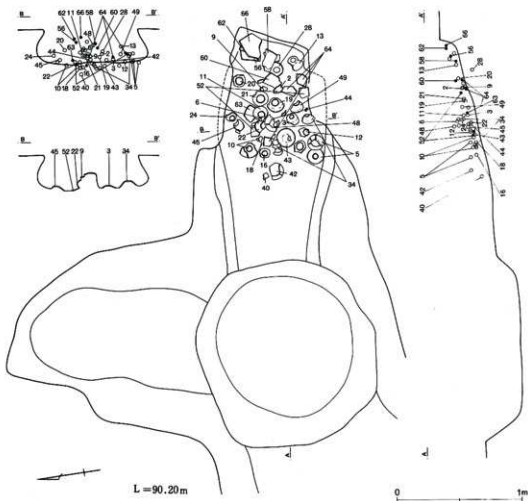


第1号遺跡

- | | | | |
|--------|------------------------------------|---------|-------------------------------|
| 1 黒褐色土 | 焼土粒子、焼土ブロック、炭化粒子、白色粒子、小礫（直径2cm）含む。 | 9 黒褐色土 | 小礫（直径1〜1.5cm）、遺物少量含む。 |
| 2 暗褐色土 | 焼土粒子、炭化粒子、白色粒子、小礫少量含む。 | 10 暗褐色土 | 直径1cmの小礫、遺物、炭化物、焼土粒子少量含む。 |
| 3 黒褐色土 | 炭化物多量含む。焼土粒子は細かい。 | 11 暗褐色土 | 白色粒子多量含む。他に遺物、焼土粒子、ローム粒子少量含む。 |
| 4 暗褐色土 | 炭化物、焼土ブロック多量含む。粘性強い。 | 12 暗褐色土 | ロームブロック多量含む。天井部の崩落土。 |
| 5 暗褐色土 | 焼土ブロック、ロームブロック、ローム粒子含む。やや粘性が強まる。 | 13 灰褐色土 | 炭化粒子、焼土粒子、ローム粒子少量含む。 |
| 6 暗褐色土 | ロームブロック、ローム粒子少量含む。遺物は大型破片が多い。 | 14 暗褐色土 | 炭化物、焼土ブロック少量含む。 |
| 7 暗褐色土 | ローム粒子含む。軟弱。 | 15 黒褐色土 | 暗灰色ブロック、焼土ブロック、焼土ブロック、炭化物含む。 |
| 8 黄褐色土 | 灰褐色焼土ブロック、天井部の崩落土。 | 16 青灰色 | |
| | | 17 多量色 | |

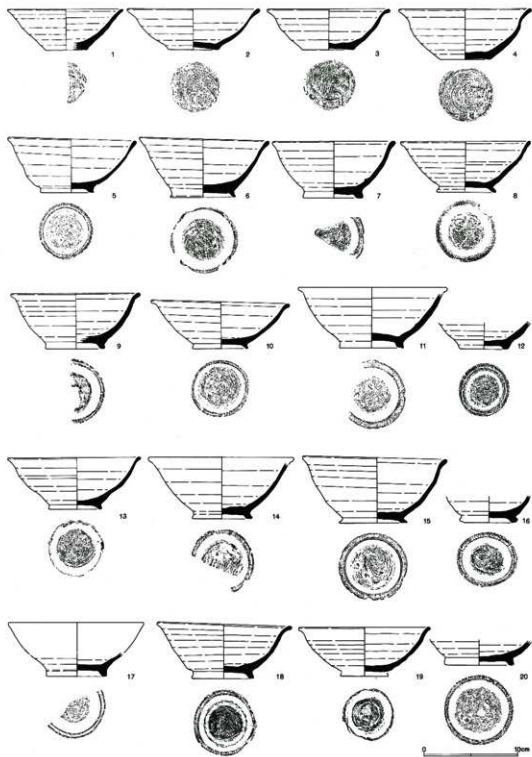
第3図 第1号窟跡

焚口は残存幅75cmを測る。側壁は殆どが崩落しているが、残存部は厚さ3〜5cmにわたって熱を被っており、十分に温度が上がっていたことを示している。しかし、側壁や天井部の崩落は燃焼部から焼成部の一部まで及んでおり、地上にでた天井や壁構造が崩落しやすい構造であったことを窺わせる。燃焼部は約70cmの長さがあり、側壁は燃焼部から焼成部にかけて挟り込まれ、最大幅は約1mを測る。焚口付近中央部には直径10cm、深さ15cmの円形のピットがあり、多量の炭化物が混入



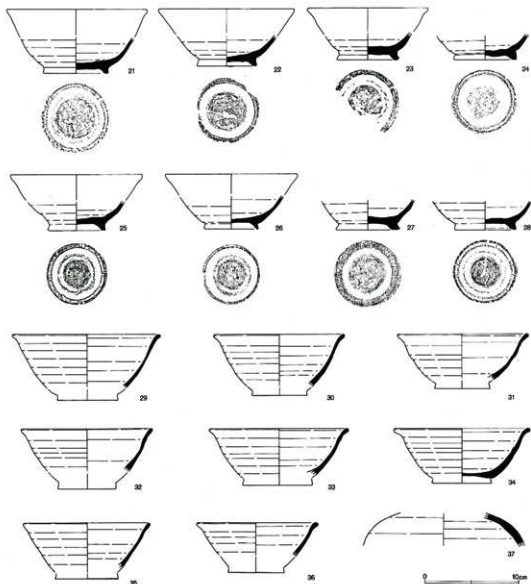
第4図 第1号窯跡遺物出土状況図（最終面）

していた。床面は部分的に凹凸があるものの比較的平坦で、赤褐色～橙褐色を呈する。床面中央壁際には直径約5cm、残存長20cm程の炭化材が検出されたが、多くの炭化物はブロック状になって浮いており、床面に付着した状態のものは少ない。焼成部は燃焼部へは床面の傾斜が約10°になり、床面及び残存する側壁は青灰色に還元化されている。床面は平坦で、焼台の高台付坏と平瓦は側壁際まで敷かれる。側壁は両壁とも5～10cmほど挟り込まれるが、20～25cmの高さで直線的に立ち上がり、天井部へと移行する。天井部の崩落は焼成面直上の第12層中に現われており、瞬時の崩落によって埋没したことを窺わせる。焼成は燃焼部において灰の掻きだしがみられるものの、粘土等による窯体の補強や他の焼成面が確認できないことから第一次焼成で終了または焼成途中で天井部の崩落等により中断し、廃棄されたものと考えられる。煙道部は焼成部から連続した緩斜面上にあり、奥壁付近には南北に不整形形のピットが二ヶ所確認された。北側のピットには壁と平行に平瓦が取められており、南側のピットと合わせて煙出しの機能をもっていたものと考えられる。また、焼成



第5図 第1号森跡出土遺物(1)

部との境には焚口付近と同様、直径・深さとも10cmの円形のピットが確認された。土層中には炭化物が多く混入しており、低い天井部分を支える構築部材が入っていた可能性も考えられる。奥壁は直線的につくられ、ほぼ垂直に立ち上がる。この付近の出土遺物はなく、ロームブロックが多く混入する。

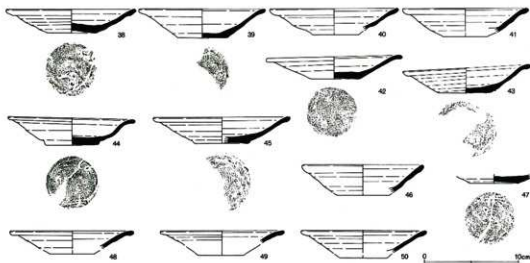


第6図 第1号窯跡出土遺物(2)

第1号窯跡遺物観察表 (第5～7図)

番号	部 種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎 土	焼成	色 調	残存率	出土位置・その他
1	坏	(12.3)	(4.3)	(4.5)	A C	C	灰白	25	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
2	坏	(14.2)	4.3	5.3	A C G	C	浅黄	50	ロクロ調整、回転糸切り未調整、焼台。

番号	器 種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎 土	施 成	色 調	残存率	出 土 位 置 ・ そ の 他
3	坏	13.1	4.3	5.4	A C I	B	灰白	50	ロクロ調整、回転余切り未調整、覆土。
4	坏	(14.1)	5.3	5.4	A C	A	暗オリーブ褐	40	ロクロ調整、回転余切り未調整、覆土。
5	高台付坏	13.7	5.7	5.7	A	B	灰オリーブ	90	ロクロ調整、焼台。
6	高台付坏	13.9	6.2	7.0	A C G	B	にぶい黄	70	ロクロ調整、覆土。
7	高台付坏	(13.1)	6.0	(6.4)	A C	B	灰	30	ロクロ調整、覆土。
8	高台付坏	13.8	5.4	6.3	A C	A	灰	60	ロクロ調整、覆土。
9	高台付坏	(13.9)	5.9	(6.3)	A C G	C	灰オリーブ	40	ロクロ調整、焼台。
10	高台付坏	14.8	5.0	6.0	A C	A	オリーブ黄	70	ロクロ調整、焼台。
11	高台付坏			6.8	A	A	灰	60	ロクロ調整、焼台。
12	高台付坏			5.2	A C	A	灰	20	ロクロ調整、覆土。
13	高台付坏	14.2	5.5	5.7	A C	B	にぶい黄橙	40	ロクロ調整、焼台。
14	高台付坏	(15.5)	(6.5)	(6.4)	A C	A	灰	40	ロクロ調整、覆土。
15	高台付坏	15.4	6.9	7.2	A C I	A	黄灰	100	ロクロ調整、覆土。
16	高台付坏			6.2	A C	A	黄灰	30	ロクロ調整、焼台。
17	高台付坏			6.4	A C	B	褐	20	ロクロ調整、覆土。
18	高台付坏	14.4	5.8	6.6	A C	B	灰黄褐	100	ロクロ調整、覆土。
19	高台付坏	(14.0)	(5.2)	(5.5)	A C I	B	灰黄	50	ロクロ調整、焼台。
20	高台付坏			7.3	A C	B	にぶい橙	40	ロクロ調整、焼台。
21	高台付坏			7.0	A C	B	灰黄褐	60	ロクロ調整、焼台。
22	高台付坏			6.4	A C	C	にぶい黄橙	40	ロクロ調整、覆土。
23	高台付坏			6.6	A C	B	黒褐	50	ロクロ調整、覆土。
24	高台付坏			6.6	A C	B	灰黄	30	ロクロ調整、焼台。
25	高台付坏			6.1	A C	C	暗灰黄	40	ロクロ調整、覆土。
26	高台付坏			5.8	A C I	B	明黄褐	30	ロクロ調整、覆土。
27	高台付坏			6.8	A C	C	灰黄	30	ロクロ調整、覆土。
28	高台付坏			6.4	A C	C	にぶい黄橙	30	ロクロ調整、覆土。
29	高台付坏	(15.8)			A C	C	にぶい橙	60	ロクロ調整、覆土。
30	高台付坏	(14.0)			A C	C	灰白	10	ロクロ調整、覆土。
31	高台付坏	(13.9)			A C	B	明黄褐	25	ロクロ調整、覆土。
32	高台付坏	(14.0)			A C	B	灰白	30	ロクロ調整、覆土。
33	高台付坏	(14.9)			A C	B	橙	30	ロクロ調整、覆土。
34	高台付坏	(14.5)	(5.8)	(6.4)	A C I	C	にぶい黄橙	40	ロクロ調整、焼台。
35	高台付坏	(13.5)			A C	C	灰白	20	ロクロ調整、覆土。
36	高台付坏	(13.0)			B C	B	灰オリーブ	20	ロクロ調整、覆土。
37	长頸瓶				A C		灰	10	ロクロ調整。
38	皿	13.8	2.5	5.2	A C G	B	オリーブ褐	95	ロクロ調整、回転余切り未調整、覆土。
39	皿	(13.5)	3.1	(5.3)	A C	A	橙	30	ロクロ調整、回転余切り未調整、覆土。
40	皿	13.7			A C	A	にぶい赤褐	60	ロクロ調整、覆土。
41	皿	(13.6)			A C	B	にぶい褐	30	ロクロ調整、覆土。
42	皿	14.5	2.4	5.3	A C G	C	にぶい黄褐	80	ロクロ調整、回転余切り未調整、覆土。
43	皿	13.6	2.7	6.1	A C I	A	暗灰黄	90	ロクロ調整、回転余切り未調整、覆土。
44	皿	13.6	2.9	5.7	A C G	B	にぶい橙	70	ロクロ調整、回転余切り未調整、覆土。
45	皿	(14.6)	2.8	(5.8)	A C		にぶい黄橙	30	ロクロ調整、回転余切り未調整、覆土。
46	皿	(13.0)			A C	B	にぶい褐	30	ロクロ調整、覆土。
47	皿			5.2	A C	C	にぶい黄橙	20	ロクロ調整、回転余切り未調整、覆土。
48	皿	(13.2)			A C	A	灰黄	30	ロクロ調整、覆土。
49	皿	13.3			A C	A	灰白	30	ロクロ調整、焼台。
50	皿	(13.4)			A C	B	にぶい赤褐	20	ロクロ調整、覆土。

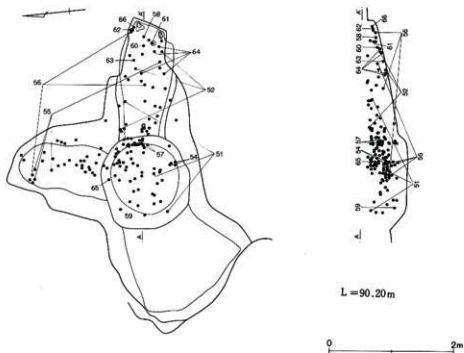


第7図 第1号竈跡出土遺物(3)

出土遺物 (第5～11図)

出土遺物には坏、高台付坏、皿、長頸瓶、平瓦がある。坏は数量としては少ないが、主体的な生産品であった皿と殆ど同一のレヴェルから出土していることや焼台にはみられないことからこの竈は坏、高台付坏、皿の生産を主目的に構築されたものと考えられる。坏は1・2と3・4の二種類に分けられる。1～3は底径がほぼ同一で、口径及び口縁部～体部の形態において異なる。4はやや大型で、法量や形態は高台付坏と殆ど同一である。口縁部は大きく屈曲し、体部は丸味をもち、底部から体部下半に粘土を集めて厚くつくることなども高台付坏と類似した点である。底部は回転糸切り未調整である。高台付坏は平瓦とともに焼台としても使用されている。焼台となっている高台付坏の大半は口縁部が壊れ(意図的に壊している可能性がある)、可能な限り水平に敷設されるが、焼成部は次第に狭く築かれるため、壁際は不安定で(天井の崩落時の影響を考慮しても)内傾斜している。形態は体部から口縁部にかけて内湾するものと口縁部が大きく反るものがあり、口径は13.1～15.5cm、底径は5.7～7.0cm、器高は5.0～6.9cm(いずれも推定復元を除く)の中で推移する。相対的には口径14cm、底径6.4cm、器高6.0cm、口縁部を積み出すように肥厚気味にし、外反するものが多い。高台はすべて貼りつけるもので、底部周辺を少し削り粘土を継ぎ足して両端を撫でて仕上げる。したがって高台は割れやすく、高台付坏の約3割は焼成状態の善し悪しにかかわらず、破損している。底部は回転糸切り未調整である。長頸瓶は前庭部より出土しているが、2号竈と近接しており、後に混入した可能性がある。皿は42・45を除くと口径13.6～13.8cm、底径5.7cm前後、器高2.8cm前後の中でまとまりがある。底部はやや厚く、口縁部は積み出すように肥厚気味に端部を作る。口縁部の形態には直線的なものと端部を大きく外反させるものの二種類がある。また、底部には44・45などのように粘土素材を継ぎ足して肥厚させるものがある。底部は回転糸切り未調整

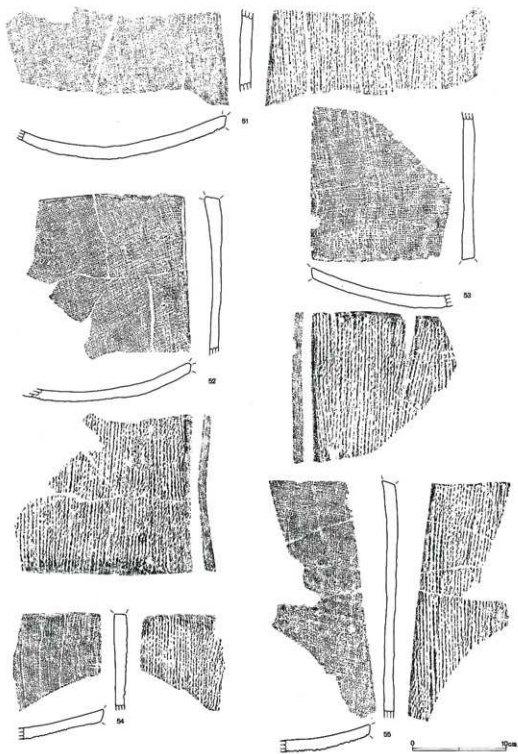
である。平瓦は覆土及び床面より出土している。いずれも粘土紐による一枚造りである可能性が高い。凹面は3cmあたり20本前後の布目、凸面には縄叩きが施される。縄叩きには粗い叩きと細かい叩きの二種類以上がある。全体に風化が進んで割がれやすくなっている瓦が多いが、中心部は薄く、端部は厚く作られる傾向がある。64～66は中央やや上寄りに模骨文字「上」の逆字が認められる。



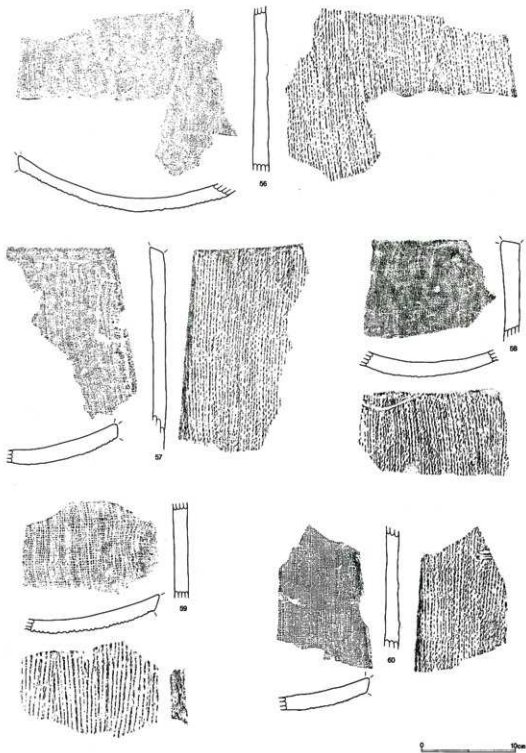
第8図 第1号窟跡出土平瓦分布図

第1号窟跡遺物観察表 (第9～11図)

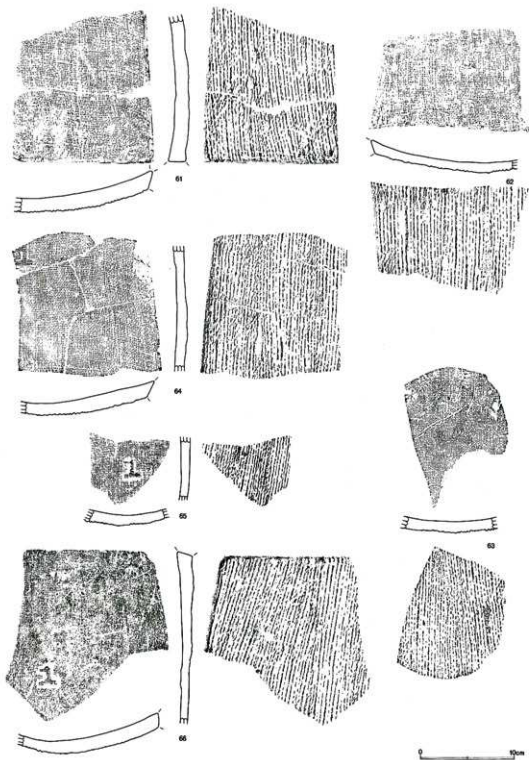
番号	器種	凹面	布目単位(本)	凸面	技法	糸切	成形	胎土	焼成	色質	残存率	その他
51	平瓦	布目	21×21	縄叩き	一枚造	なし		ACI	C	にぶい黄緑	18	
52	平瓦	布目	20×17	縄叩き	一枚造	なし		AC	A	黄灰	24	焼台。
53	平瓦	布目	10×17	縄叩き	一枚造	なし		ABC I	B	灰黄褐	20	
54	平瓦	布目	21×23	縄叩き	一枚造	なし		ACE	B	灰	8	
55	平瓦	布目	18×20	縄叩き	一枚造	なし		ACG	B	灰オリブ	17	
56	平瓦	布目	22×24	縄叩き	一枚造	なし		ACF	C	にぶい黄	20	
57	平瓦	布目	24×22	縄叩き	一枚造	なし		ACF	C	にぶい黄緑	24	
58	平瓦	布目	23×26	縄叩き	一枚造	なし		AC	C	にぶい黄緑	13	
59	平瓦	布目	14×13	縄叩き	一枚造	なし		ACE	B	にぶい黄	12	
60	平瓦	布目	23×22	縄叩き	一枚造	なし		ABCE	B	にぶい褐	14	焼台。
61	平瓦	布目	19×17	縄叩き	一枚造	なし		ACI	B	黄灰	20	焼台。
62	平瓦	布目	20×17	縄叩き	一枚造	なし		ABCGI	C	灰黄褐	12	
63	平瓦	布目	22×24	縄叩き	一枚造	なし		AC	B	にぶい黄褐	12	
64	平瓦	布目	18×17	縄叩き	一枚造	なし		ACFI	B	黄灰	20	焼台。
65	平瓦	布目	22×21	縄叩き	一枚造	なし		ACFG	C	灰	6	
66	平瓦	布目	21×20	縄叩き	一枚造	なし		AC	B	にぶい橙	22	



第9圖 第1号窟跡出土遺物(4)



第10图 第1号窟跡出土遺物(5)



第11图 第1号窟跡出土遺物(6)

2. 第2号窯跡 (第12回)

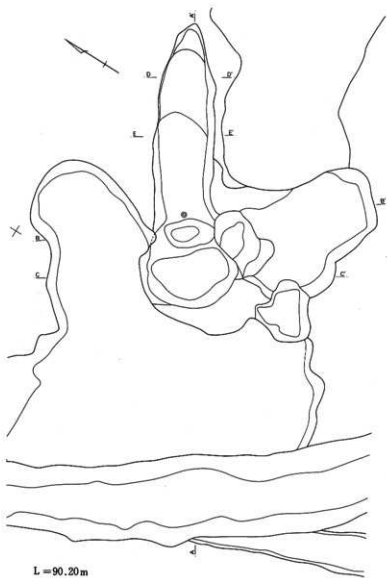
C-3グリッドに位置する。主軸方位はN-60°-Eを指す。窯の規模は長軸4.8m、最大幅1mである。2号窯は1号窯の北西に近接して構築された半地下式無階登窯で、廃棄された1号窯の出入口部分を再利用している。窯は1号窯と同様に楕円形の土坑を1m程掘り、1号窯の前庭部を避けるように北東方向に緩やかな傾斜をつけながら溝状に掘り込み窯体を構築する。窯体は一般的な登窯の形態を呈しており、特異な形態の1号窯に比べて大量生産型の窯を構築しようとした意図が窺われる。しかし、窯の大きさは主軸方向が意識されているため、礫層に突き当たったその時点で窯体の規模が決定してしまったものと考えられる。遺物の分布は、窯体から西側の1号溝付近まで黒褐色～暗灰褐色の灰層中にみられるが、大部分は窯体及び前庭部に集中している。窯の焼成は数度に及ぶと考えられるが、一度の焼成が完了すると灰とともに窯体内が清掃されるためか各々の焼成面は検出されなかった。出土遺物は、皿、高台付杯、長頸壺、長頸瓶、甕、平瓦である。焼台には高台付杯と平瓦が1号窯と同様使用されていた。焼成部の傾斜角は約7°である。

窯構造

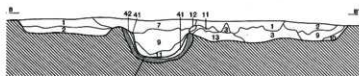
2号窯は1号窯の位置を意識して構築されるが、窯の形態は一般的な登窯の形態を示している。構築作業は前庭部として1号窯と同様に直径約1.5mの土坑を約1m掘り込むことから始められる。1号窯のように平らではなく、緩やかに窪む。覆土は黒褐色土を基調に暗灰褐色が混じる。出土遺物の大半はこの前庭部に集中し、特に炭化物和灰色粘土の混入が顕著である。前庭部の遺物は各層に平均的に混入しており、(遺物の分布状況から判断すると)窯体から掻きだされた灰は前庭部北側の出入口状の掘り込みに積まれていたものと考えられる。焚口は幅60cmで、浅い窪み状になって

第2号窯跡

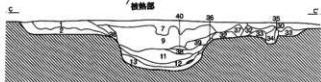
- | | |
|---|--|
| 1 黒褐色土 遺物、炭化物、焼土ブロック含む。 | 22 暗灰褐色土 第20層に類似し、硬質。 |
| 2 黒褐色土 窯壁片、ロームブロック含む。 | 23 暗灰褐色土 焼土粒子、灰色粘土粒子、炭化物少量含む。遺物は大型破片が多い。 |
| 3 明灰褐色土 粘土粒子、ロームブロック含む。 | 24 暗灰褐色土 焼土粒子多量含む。遺物は瓦の破片が多い。 |
| 4 灰褐色土 粘土。 | 25 暗灰褐色土 焼土ブロック、窯壁片多量含む。 |
| 5 黄褐色土 ロームブロック多量含む。 | 26 暗褐色土 焼土ブロック、灰色粘土ブロック少量含む。軟質。 |
| 6 灰褐色土 砂質。 | 27 暗赤褐色土 焼土ブロック、灰色粘土粒子含む。 |
| 7 黒褐色土 小礫 (直径1~2cm)、焼土ブロック含む。 | 28 暗褐色土 焼土ブロック、灰色粘土ブロック、炭化粒子少量含む。 |
| 8 暗灰褐色土 炭化粒子含む。 | 29 暗赤褐色土 焼土粒子、灰色粘土粒子含む。 |
| 9 黒色土 炭化物多量含む。 | 30 暗灰褐色土 焼土粒子、炭化物、小礫、砂粒多量含む。遺物は小破片が多い。 |
| 10 暗灰褐色土 焼土粒子、焼土ブロック、炭化粒子含む。 | 31 暗灰褐色土 小礫 (直径約1cm) 含む。遺物は小破片が多い。 |
| 11 灰黒色土 焼土ブロック、炭化粒子多量含む。 | 32 暗灰褐色土 小礫、炭化粒子少量含む。 |
| 12 黒褐色土 炭化物多量含む。他に焼土粒子、遺物小破片、小礫 (直径1cm) 含む。 | 33 明灰褐色土 小礫、ロームブロック少量含む。 |
| 13 黒色土 炭化物多量含む。他に灰色粘土粒子、小礫 (直径約1cm) 含む。 | 34 灰褐色土 黒色ブロック少量含む。 |
| 14 暗灰褐色土 炭化粒子多量含む。他に灰色粘土粒子、小礫 (直径約1cm) 含む。 | 35 暗灰褐色土 ロームブロック少量含む。 |
| 15 明灰褐色土 ローム粒子少量含む。 | 36 黄褐色土 地山崩壊土、黒色土少量含む。 |
| 16 暗灰褐色土 焼土ブロック、炭化物含む。 | 37 暗灰褐色土 炭化物、小礫少量含む。 |
| 17 赤褐色土 焼土ブロック多量含む。ロームブロック少量含む。(天井部崩落土) | 38 黒色土 細かな窯壁ブロック多量含む。 |
| 18 明灰褐色土 焼土ブロック、灰色粘土ブロック、遺物多量含む。(天井部崩落土) | 39 黒色土 炭化粒子、窯壁ブロック含む。 |
| 19 暗灰褐色土 焼土粒子、砂粒含む。 | 40 灰黒色土 窯壁ブロック多量含む。 |
| 20 暗灰褐色土 焼土ブロック多量含む。 | 41 赤褐色 (粘土) |
| 21 暗灰褐色土 焼土粒子少量含む。 | 42 にいり煙褐色 |
| | 43 淡黄灰色 |
| | 44 青灰色 |



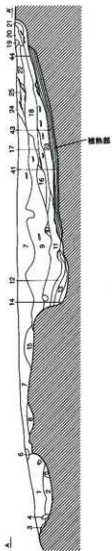
L = 90.20 m



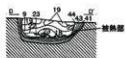
被熱部



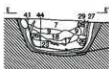
被熱部



被熱部



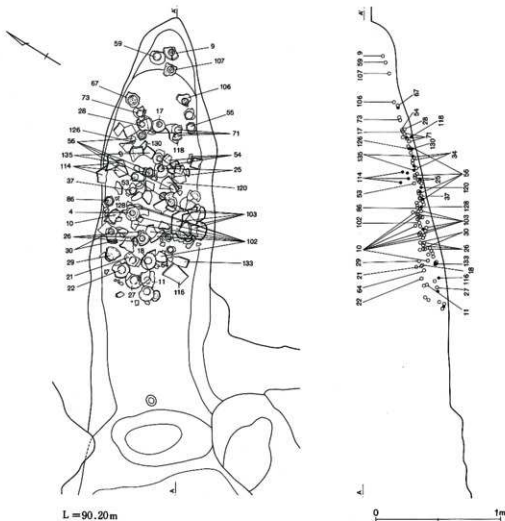
被熱部



被熱部

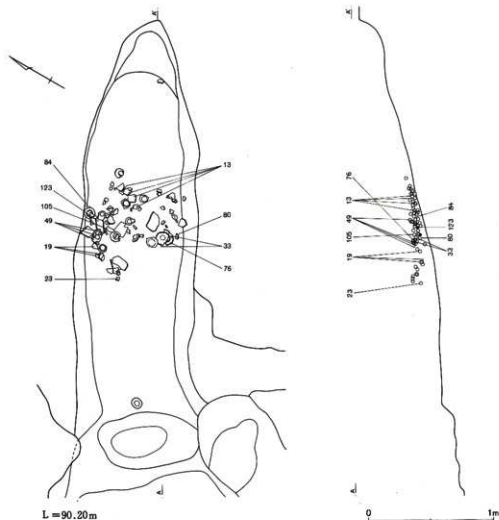
0 2m

第12図 第2号窟跡



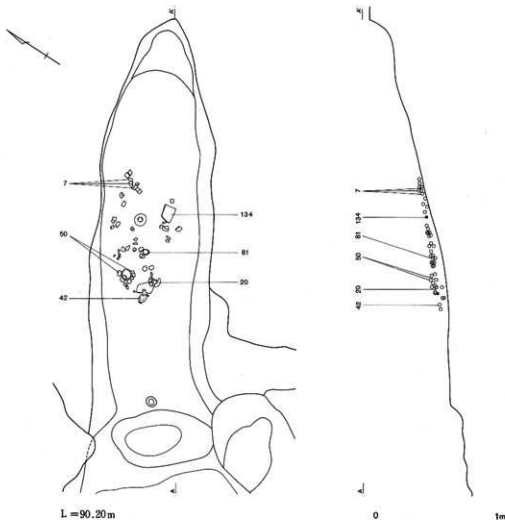
第13図 第2号窯跡遺物出土状況図(1)

いる。手前には1号窯でみられた直径10cm、深さ10cmのビットがあり、炭化物の混入が著しい。焚口から燃焼部にかけては焼成の際、熱を相当受けており、最大で約10cmに及ぶ。燃焼部はほぼ平坦で、焼成部へかけて微傾斜する。床面から側壁にかけては部分的に還元化されるが、大部分は酸化されたにぶい赤褐色を呈する。側壁は直立気味に立ち上がり、緩やかに外傾する。また、焚口から燃焼部の一部には、窯体補強のためのスサ入り粘土の付着が確認された。焼成部は長軸2m、幅1mを測る。床面には至る所に凹凸が見られ、部分的に階段状になるが、これは構築時に礫層にあたったために生じたと考えられる。側壁は中央部で膨らむが、次第に床面の傾斜にともなって狭く絞り込まれる。また、窯壁の残存部分から判断すると、天井の高さは1号窯よりは高く、焼成部は40~70cm程の空間が想定される。天井の崩落は土層からみる限り一律で、大半の製品を選びだした後に起ったとみられ、天井部は7~10cmの厚みが想定できる。遺物の出土は坏や皿が伏せた状態の高台付坏と平瓦上に載った状況を示しており、1号窯と同じ生産方法で焼成されたことが窺われる。平



第14図 第2号窯跡遺物出土状況図2

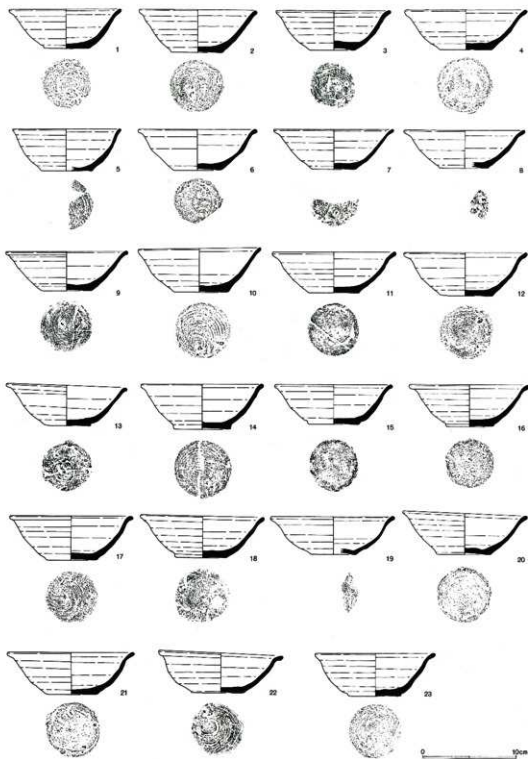
瓦は側壁付近や崩落土中から出土しており、焼台の他に補強材等としても活用されていた可能性がある。天井部の崩落土は浮いた状態の瓦の下層に位置しており、吸気孔の蓋であることも考えられる。須恵器の焼成は前庭部や灰原で出土した遺物量から数度にわたって行われたことが考えられるが、前記したように窯体が小さく、天井部が低いことを考慮すると、基本的に灰は焼成の度に掻きだされ、現状では焼台以外は最終段階の遺物と判断できる。第13-15図は遺物の出土状態を表したものであるが、各々は同一焼成面であり、異なる焼成面を示すものではない。図にあらわれているように焼台は煙道部付近まで及んでおり、燃焼部以外の使用可能な部分は焼成部となっている。遺物を取り除いた床面や側壁、崩落した天井部は、青灰色に還元化され、被熱部分は平均で10cmに及ぶ。煙道部は丸味をもち、急傾斜して立ち上がる。奥壁付近の床面は礫が露出するものの、概ね平坦であるため、一部に焼台として高台付坏が倒立して敷設されている。床面から側壁にかけては全体的にぶい赤褐色を呈する。



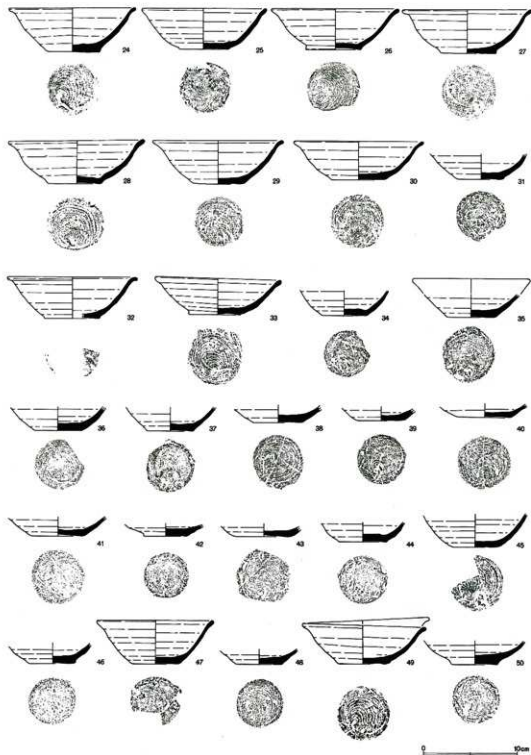
第15図 第2号竈跡遺物出土状況図(3)

出土遺物 (第16~26図)

出土遺物は坏、高台付坏、皿、長頸壺、甕、平瓦である。出土状態から、坏・高台付坏・皿が主な製品で、高台付坏は平瓦とともに焼台としても使用されている。坏(1~50)は皿に比べ燃焼部に近い位置に重ねた状態で置かれている。しかし、一部は天井の崩落や取り出す際に動いたとみられ、原位置とは言い難い。土器の焼成状態は、灰~灰オリーブ色を呈し、堅く焼き締まったものは少ない。底部~腰の部分は比較的分厚く作られ、体部に緩やかな膨らみをもつ。口縁部はやや直線的に絞り出されるものと大きく外反するものがある。いずれも端部は肥厚気味で、丸く調整される。口径は13cm、底径は5.5cm、器高は4.5cm前後の器種が全体の90%以上を占める。底部は回転糸切り未調整であるが、13~16にみられるように、底部周縁に腰を設けているものも少なくない。これらの中には、底部を回転台から切り離した後に、再び回転糸切りした粘土素材を継ぎ足すものがある。末野周辺に限らず、北武蔵のこの時期の須恵器は底部が上げ底になっている場合が多いが、南比企



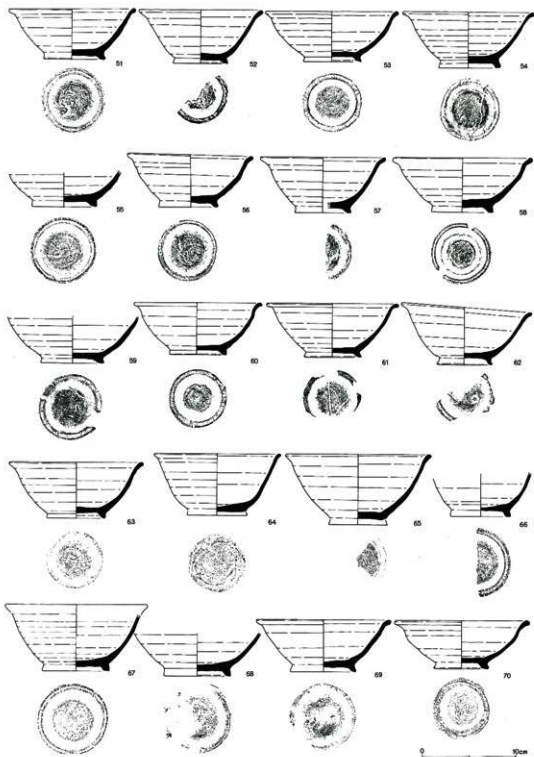
第16圖 第2号窟跡出土遺物(1)



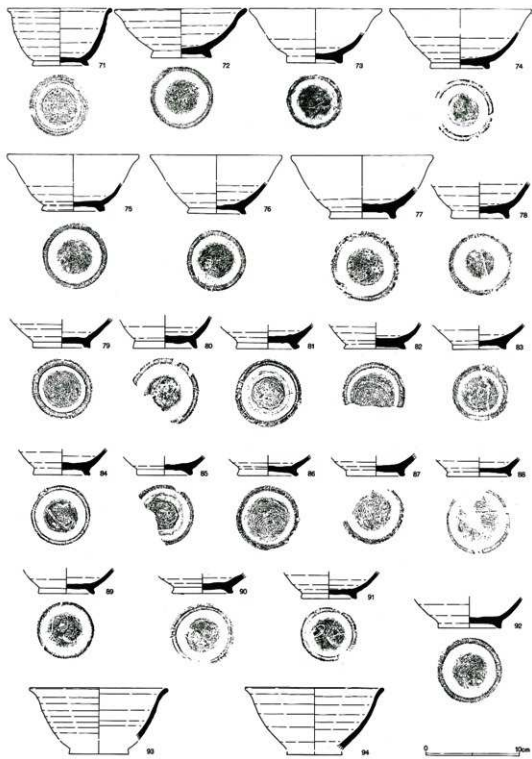
第17图 第2号窟跡出土遺物(2)

第2号窯跡遺物観察表(第16~21区)

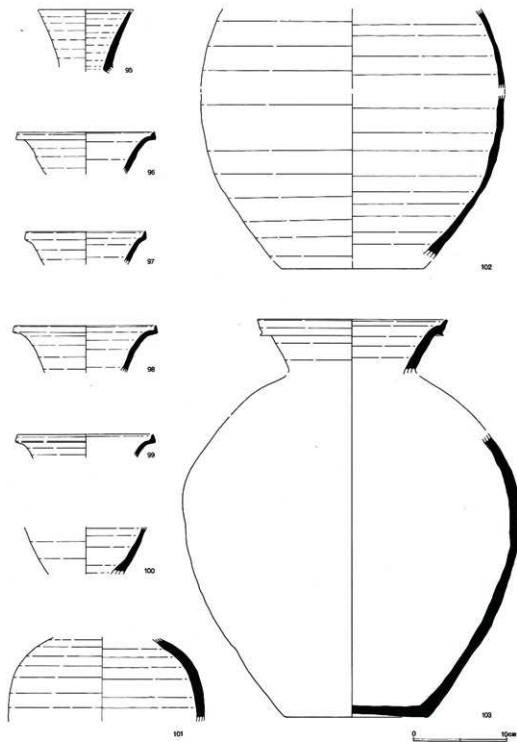
番号	器種	口径(m)	器高(m)	底径(m)	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置・その他
1	坏	12.0	4.1	4.8	ACE	A	灰	70	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
2	坏	12.6	4.5	5.0	ACGI	B	灰オリーブ	90	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
3	坏	12.3	4.2	4.8	ACI	A	灰	70	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
4	坏	13.0	4.2	5.5	ACI	A	浅黄	80	ロクロ調整、回転糸切り未調整、焼台。
5	坏	(11.6)	4.4	(5.4)	AC	A	灰	40	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
6	坏	(12.7)	4.3	5.1	A	B	明黄褐	40	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
7	坏	(12.8)	4.2	4.8	AC	B	黄褐	30	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
8	坏	(12.9)	(4.0)	(5.1)	AC	B	灰白	20	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
9	坏	13.1	4.2	5.3	ACI	B	灰オリーブ	60	ロクロ調整、回転糸切り未調整、焼台。
10	坏	13.2	4.6	5.8	ACI	B	灰	70	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
11	坏	13.2	4.3	5.5	ACGI	B	にぶい褐	70	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
12	坏	13.2	4.6	5.6	ACI	B	灰オリーブ	80	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
13	坏	13.0	4.3	4.8	ACDI	A	にぶい黄橙	70	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
14	坏	(13.2)	4.8	6.0	ACG	C	灰黄褐	40	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
15	坏	12.6	4.2	5.3	ACDEI	B	灰オリーブ	80	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
16	坏	12.9	4.4	5.0	ACE	A	暗褐	90	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
17	坏	(13.2)	4.7	5.5	ACI	A	灰褐	50	ロクロ調整、回転糸切り未調整、焼台。
18	坏	13.3	4.4	5.6	ACG	C	灰オリーブ	90	ロクロ調整、回転糸切り未調整、焼台。
19	坏	(13.3)	4.0	(5.0)	AC	A	灰白	40	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
20	坏	13.4	4.4	5.8	AC	A	灰	80	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
21	坏	13.6	4.4	5.6	ACE	A	黄灰	80	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
22	坏	13.3	4.3	5.7	ACI	B	灰褐	85	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
23	坏	12.8	4.5	5.7	AC	B	暗赤褐	85	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
24	坏	13.4	4.6	5.5	CDEG	C	灰黄	65	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
25	坏	13.3	4.3	5.2	ACDI	A	灰オリーブ	50	ロクロ調整、回転糸切り未調整、焼台。
26	坏	13.6	4.3	5.9	ACI	A	灰	70	ロクロ調整、回転糸切り未調整、焼台。
27	坏	13.7	4.6	5.8	ACI	B	灰黄	70	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
28	坏	14.5	4.6	5.6	ACGI	B	にぶい黄橙	60	ロクロ調整、回転糸切り未調整、焼台。
29	坏	(14.0)	4.6	5.5	ACI	B	灰黄	50	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
30	坏	(13.8)	4.1	5.8	ACI	B	灰黄	60	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
31	坏			4.8	AC	B	にぶい橙	30	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
32	坏	(13.8)	4.4	(5.8)	ACI	B	灰黄	30	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
33	坏	13.5	3.8	5.4	ACE	A	黄灰	70	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
34	坏			4.7	A	B	黄灰	30	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
35	坏			5.0	ACI	A	灰	30	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
36	坏			5.0	AC	A	灰オリーブ	20	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
37	坏			5.0	AC	B	オリーブ黄	40	ロクロ調整、回転糸切り未調整、焼台。
38	坏			5.2	AC	B	灰オリーブ	30	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
39	坏			5.0	AC	B	灰白	40	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
40	坏			5.6	A	A	黄灰	20	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
41	坏			5.4	A	B	明褐灰	40	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
42	坏			4.5	AC	A	灰白	20	ロクロ調整、回転糸切り未調整、焼台。
43	坏			5.2	AC	A	にぶい褐	20	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
44	坏			5.2	BC	B	黒褐	30	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
45	坏			4.7	AC	B	灰黄	30	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
46	坏			5.0	A	A	灰	40	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
47	坏	(12.4)	4.6	5.1	ACI	B	にぶい褐	40	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
48	坏			4.9	AC	B	灰褐	30	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。



第18图 第2号窑跡出土遺物(3)

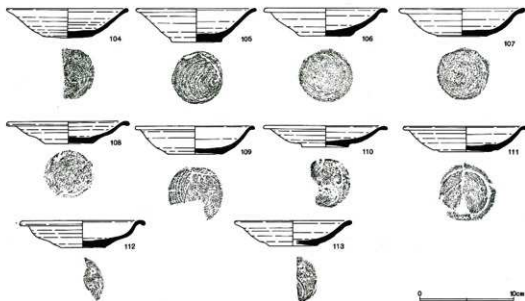


第19图 第2号窟跡出土遺物(4)



第20圖 第2号窟跡出土遺物(5)

番号	器種	口径(m)	器高(m)	底径(m)	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置・その他
49	坏	13.2	4.1	5.4	C E G I	B	灰オリーブ	60	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
50	坏			5.0	A C	A	灰	30	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
51	高台付坏	13.5	5.3	6.6	A C I	A	灰オリーブ	95	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
52	高台付坏	13.3	5.7	5.8	A C I	A	灰	35	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
53	高台付坏	(14.2)	5.3	6.1	A C	A	灰	30	ロクロ調整、焼台。
54	高台付坏	14.0	5.9	6.6	A C E G	B	灰	90	ロクロ調整、覆土。
55	高台付坏			6.9	A C I	A	灰	40	ロクロ調整、焼台。
56	高台付坏	13.4	5.5	6.3	A C I	A	灰オリーブ	80	ロクロ調整、焼台。
57	高台付坏	13.4	5.9	6.0	A C	C	灰黄	30	ロクロ調整、覆土。
58	高台付坏	(14.8)	5.8	6.5 (6.3)	A C	A	灰	40	ロクロ調整、覆土。
59	高台付坏			6.8	A C I	C	にぶい橙	60	ロクロ調整、焼台。
60	高台付坏	(13.8)	5.5	6.1	A C	B	暗褐	40	ロクロ調整、覆土。
61	高台付坏	14.2	5.7	6.1	A C	A	明褐灰	40	ロクロ調整、覆土。
62	高台付坏	(14.0)	6.0	6.0	A C I	A	灰	60	ロクロ調整、覆土。
63	高台付坏	(14.2)	5.9	6.2	A C E	A	灰	40	ロクロ調整、覆土。
64	高台付坏	(13.6)	(6.5)	(6.4)	A C	B	灰黄	40	ロクロ調整、覆土。
65	高台付坏	(15.6)	(7.4)	(6.2)	A C	A	灰	30	ロクロ調整、覆土。
66	高台付坏			(6.5)	A C	B	黄灰	30	ロクロ調整、覆土。
67	高台付坏			7.1	A G	B	灰黄	50	ロクロ調整、焼台。
68	高台付坏			7.2	A C I	A	明赤褐	40	ロクロ調整、覆土。
69	高台付坏	(14.4)	5.5	7.1	A C G	B	にぶい黄橙	40	ロクロ調整、覆土。
70	高台付坏	(14.4)	5.1	5.8	A C	A	灰	40	ロクロ調整、覆土。
71	高台付坏	(11.2)	6.1	6.0	A C	A	灰オリーブ	50	ロクロ調整、焼台。
72	高台付坏	(14.2)	5.2	6.5	A C E	B	にぶい褐	40	ロクロ調整、覆土。
73	高台付坏			(6.0)	A C	B	灰黄褐	40	ロクロ調整、焼台。
74	高台付坏			6.3	A C	B	黄灰	40	ロクロ調整、覆土。
75	高台付坏			(6.8)	A C	B	にぶい褐	40	ロクロ調整、覆土。
76	高台付坏			6.3	A C	A	灰黄	50	ロクロ調整、焼台。
77	高台付坏			7.2	A C	B	にぶい橙	30	ロクロ調整、覆土。
78	高台付坏			6.2	A	C	にぶい橙	30	ロクロ調整、覆土。
79	高台付坏			6.2	A C	A	黄灰	40	ロクロ調整、覆土。
80	高台付坏			6.9	A	B	灰オリーブ	30	ロクロ調整、覆土。
81	高台付坏			6.8	A	A	灰	40	ロクロ調整、覆土。
82	高台付坏			(6.6)	A G	A	暗灰黄	30	ロクロ調整、覆土。
83	高台付坏			5.7	A C	B	橙	30	ロクロ調整、覆土。
84	高台付坏			6.1	A	A	にぶい褐	40	ロクロ調整、焼台。
85	高台付坏			6.0	A C	A	にぶい褐	20	ロクロ調整、覆土。
86	高台付坏			6.5	A	B	暗灰黄	30	ロクロ調整、焼台。
87	高台付坏			6.2	A	B	灰黄	30	ロクロ調整、覆土。
88	高台付坏			7.0	A C	A	暗灰黄	30	ロクロ調整、覆土。
89	高台付坏			6.0	A G	B	浅黄	30	ロクロ調整、覆土。
90	高台付坏			6.5	A	A	褐	30	ロクロ調整、覆土。
91	高台付坏			5.9	A C	B	浅黄	30	ロクロ調整、覆土。
92	高台付坏			6.7	A C	C	浅黄	30	ロクロ調整、覆土。
93	高台付坏	(14.8)	(7.0)	(14.8)	A C	A	灰	30	ロクロ調整、覆土。
94	高台付坏	(14.8)		(14.8)	A	B	にぶい黄橙	30	ロクロ調整、覆土。
95	長頸壺	(10.2)			A	A	黄灰	20	ロクロ調整。
96	長頸壺	(15.0)			A C I	A	灰黄	10	ロクロ調整。

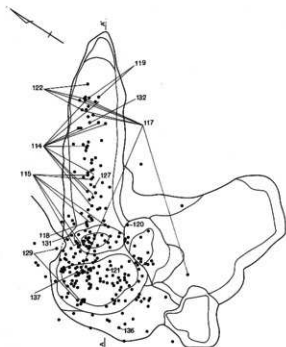


第21図 第2号窟跡出土遺物(6)

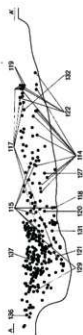
番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置・その他
97	長頸壺	(13.0)			AC		灰黄	10	ロクロ調整。
98	長頸壺	(15.5)			AI		にぶい黄褐色	10	ロクロ調整。
99	長頸壺	(15.0)			AC	B	灰黄	10	ロクロ調整。
100	長頸瓶				AC	A	灰	20	横ナデ。
101	長頸瓶						灰		内面横ナデ。
102	罍						灰		ナデ。
103	罍	(20.2)	(42.2)	15.4	ACEI	A	灰	70	横ナデ。底部ヘラ削り。
104	皿	(13.0)	3.1	(5.1)	AC	A	灰オリーブ	30	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
105	皿	(12.9)	3.6	5.4	AC	C	灰オリーブ	50	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
106	皿	(13.2)	3.0	5.6	ACI	B	にぶい黄褐色	50	ロクロ調整、回転糸切り未調整、焼台。
107	皿	(13.4)	3.0	5.3	AC	B	にぶい黄褐色	50	ロクロ調整、回転糸切り未調整、焼台。
108	皿	(13.1)	2.3	5.0	AC	B	にぶい黄褐色	40	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
109	皿	(12.8)	3.0	5.8	AC	B	橙	70	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
110	皿	(13.3)	(2.2)	(5.1)	ACF	B	灰オリーブ	30	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
111	皿	13.3	2.7	6.8	AC	A	橘	50	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
112	皿	(13.4)	(2.9)	(4.7)	AC	A	暗赤褐	30	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。
113	皿	(12.6)	(2.7)	(5.0)	AC	C	浅黄	20	ロクロ調整、回転糸切り未調整、覆土。

第2号窟跡遺物観察表 (第23~26図)

番号	器種	凹面	春日草目(本)	凸面	技法	糸切	成形	胎土	焼成	色調	残存率	その他
114	平瓦	布目	21×18	縄叩き	一枚造	なし		AC	B	暗灰黄	75	
115	平瓦	布目	22×24	縄叩き	一枚造	なし		ACEI	B	にぶい橙	16	
116	平瓦	布目	16×13	縄叩き	一枚造	なし		ACDF	B	暗灰黄	14	焼台。
117	平瓦	布目	23×23	縄叩き	一枚造	なし		AFG	C	にぶい橙	16	
118	平瓦	布目	22×25	縄叩き	一枚造	なし		ACG	B	暗灰黄	22	焼台。
119	平瓦	布目	21×21	縄叩き	一枚造	なし		ACEI	B	にぶい黄褐色	34	



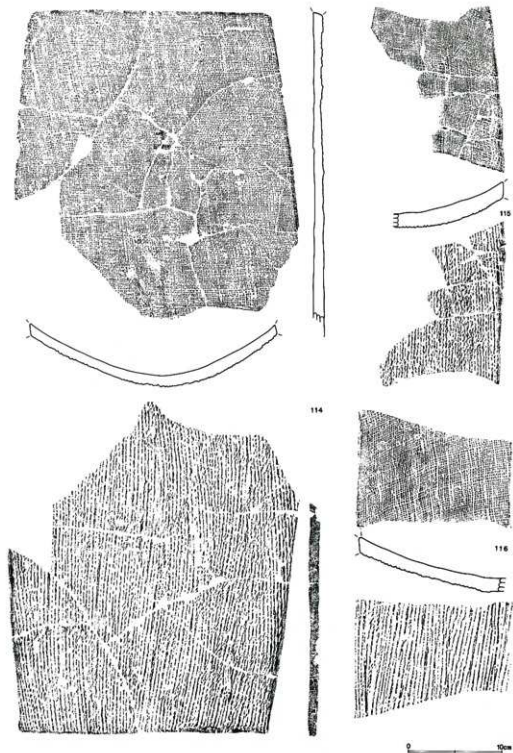
L = 90.20m



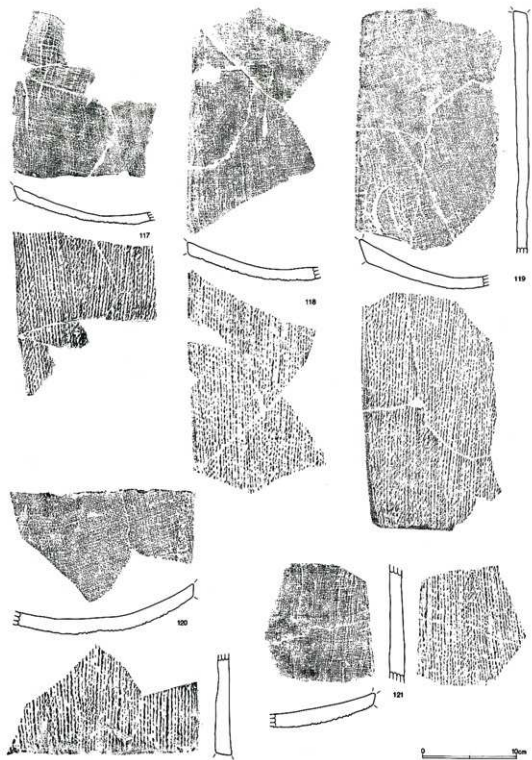
0 2m

第22図 第2号窟跡出土平瓦分布図

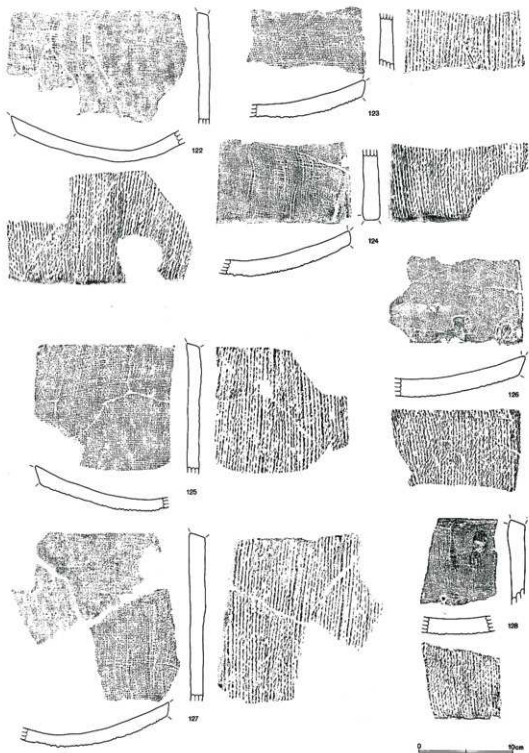
120	平瓦	布目	18×18	純叩き	一枚造	なし	ABCE	A	暗灰黄	10	礎台。
121	平瓦	布目	21×20	純叩き	一枚造	なし	AC	B	にぶい黄褐	12	
122	平瓦	布目	24×22	純叩き	一枚造	なし	ABCI	B	にぶい黄褐	18	
123	平瓦	布目	18×18	純叩き	一枚造	なし	ABC	B	暗灰黄	8	礎台。
124	平瓦	布目	24×22	純叩き	一枚造	なし	ABC	C	明黄褐	10	
125	平瓦	布目	21×17	純叩き	一枚造	なし	ACF	B	暗灰黄	16	
126	平瓦	布目	26×23	純叩き	一枚造	なし	ABF	A	黄灰	10	
127	平瓦	布目	18×17	純叩き	一枚造	なし	ABCI	C	にぶい黄褐	22	
128	平瓦	布目	23×28	純叩き	一枚造	なし	ABF	A	黄灰	5	
129	平瓦	布目	23×22	純叩き	一枚造	なし	AC	B	にぶい黄褐	8	
130	平瓦	布目	23×25	純叩き	一枚造	なし	AC	A	にぶい黄褐	6	
131	平瓦	布目	23×21	純叩き	一枚造	なし	ACD	B	にぶい黄	8	
132	平瓦	布目		純叩き	一枚造	なし	ABCI	C	にぶい黄褐	14	
133	平瓦	布目	19×19	純叩き	一枚造	なし	ABCF	B	にぶい黄褐	14	礎台。
134	平瓦	布目	26×24	純叩き	一枚造	なし	ACE	B	黄灰	10	礎台。
135	平瓦	布目	21×17	純叩き	一枚造	なし	ACF	A	黄灰	16	礎台。
136	平瓦	布目	22×24	純叩き	一枚造	なし	ABC	B	灰黄褐	10	
137	平瓦	布目		純叩き	一枚造	なし	AC	B	灰黄	2	
138	平瓦	布目	19×20	純叩き	一枚造	なし	ABC	C	灰白	2	



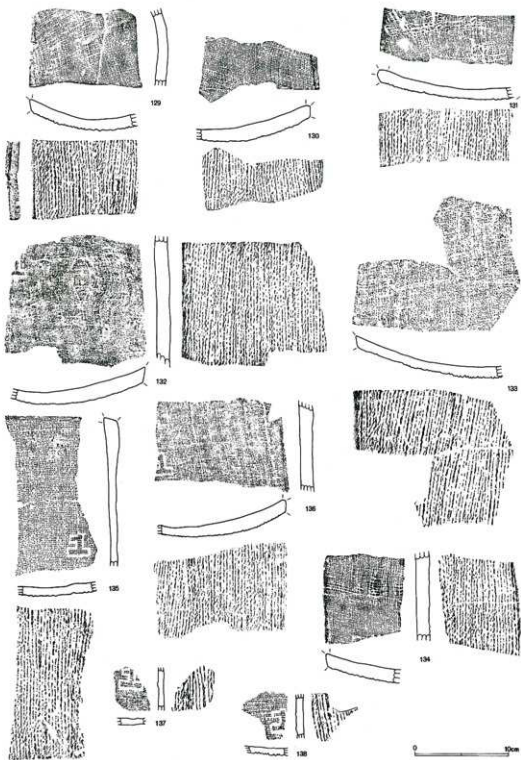
第23图 第2号窟跡出土遺物(7)



第24图 第2号窟跡出土遺物(6)



第25图 第2号窑跡出土遺物(9)



第26图 第2号窟跡出土遺物00

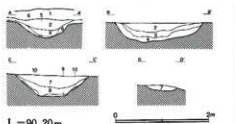
窯跡群や東金子窯跡群では、殆ど底部に粘土素材を継ぎ足す技法は行われていない。一般的に末野周辺の粘土素材は、粒子は粗くて、生地が伸びにくく、収縮率の高い性質をもっていると考えられている。したがって、このような坯は粘土素材の性質を補い、器の安定感を増すために採られた技法とみられる。高台付坯は1号窯に比べ、完存率が高い。図示したものの多くは焼台であるため、天井や側壁の崩落時に動かされた以外は倒立した状態で出土している。器種は平均で口径14cm、底径6.2cm、器高5.7cm前後のものが約80%を占める。器種の形態は体部が緩やかに膨らみ、口縁部は大きく外反し、端部は肥厚気味に摘み出されている。ロクロの痕跡は明瞭で、特に腰の部分を押し出すように体部へ移行する。内面の見込みは、ロクロの痕跡を残しながらも坯や皿と同様に平らに作られるものが多い。底部は回転糸切り後に高台を貼りつけるが、一部は底部周辺を削って粘土素材の接合をより強固にしたものもみられる。しかし、多くは高台を少量の補足粘土で両端を撫でて仕上げたものであるため、割れやすく、高台だけの出土例が窯体内や灰原でも50点以上にのぼる。51・52・64は体部が直線的に立ち上がり、口縁部が小さく外反する。体部が直線的に開くものは、相対的に口径が小さく作られる。坯にも同様な傾向が窺え、底部は肥厚気味に作られ、腰から体部への押し出しも類似しているため、1号窯—4（第5図）のように高台の有無によってその器種が異なる印象を与えるものが存在する。長頸瓶は口縁部の破片が数点出土した。ロクロ調整が顕著で、端部に向かって薄く作られる。長頸壺（第20図96～99）はいずれも口縁部の破片で、端部は細く折り曲げられる。焼成は灰—灰オリーブで、坯と同じ焼成温度であったとみられるが、同時に焼成されたか否かは確認できなかった。長頸瓶、長頸壺とも出土位置は窯体内及び灰原である。甕（第20図102・103）は、出土位置から焼成部中央手前側に置かれていたと考えられる。103は胴部中央に最大幅があり、大きく張りだす。内外面は横撫でされるが、特に内面は輪積みの痕跡が明瞭に残る。器内は底部から口縁部まで肥厚気味に推移し、口縁部は大きく屈曲して、端部は斜め上方に開く。底部は全面縦方向に篋削りされる。皿は出土状態から焼成部後方に置かれていたと思われる。色調は灰オリーブからいぶ黄褐色を呈し、焼成部手前側と比べて焼成温度が十分上がっていないことを窺わせる。形態は104を除いて口縁部端部が大きく外反する。底部には回転糸切り後、粘土素材を張り合わせたものと切り離した状態のものが混在する。平均値で口径は13.1cm、底径は5.4cm、器高は2.9cmを測る。平瓦は床面、覆土（天井崩落土上層—第7・9層）、灰原から出土している。凹凸面には糸切りの痕跡はなく、横方向にひびの入る痕跡が一部の瓦に見られることから粘土紐による一枚造りと考えられる。凹面には3cmあたり20本前後の布目、凸面には縄叩きが施される。縄叩きには1号窯にも見られたように、粗い叩きとやや細かい叩きの二種類以上がある。全体に風化が進んで割れやすいが、灰原出土の瓦に比べて窯体内より出土した瓦は焼き締まっていることが多い。形態は中心部より側端部や広端部、狭端部が厚く作られる。端部の調整はすべて縦方向の篋削りで、部分的に面取りが施されるものがある。114・135～138は凹面中央やや狭端部寄りに模骨文字「上」の逆字が認められる。色調は暗灰黄—いぶ黄褐色である。

3. 遺物の分布について

桜沢窯跡の遺物分布は、主に1号窯、2号窯、1号溝に集中する傾向がある。1号窯では窯体内及び前庭部、2号窯では前庭部、1号溝では遺跡中央部の大きく曲がる部分に限定することができる。1号窯の廃棄直後に構築された2号窯と1号溝との間の灰原は、5～20cmの厚さで灰層の堆積が認められるが、意外なほど遺物分布量は少ない。1号窯、2号窯とも出入口付近には灰や遺物は殆ど存在しないことから、窯体内から掻きだされた灰や破損品は、大半が前庭部北側に積み、廃棄時に埋め戻され、比較的短期間に埋まった可能性が高い。また、溝は2号窯の作業にともなって、灰原の一部となっていったものと考えられる。



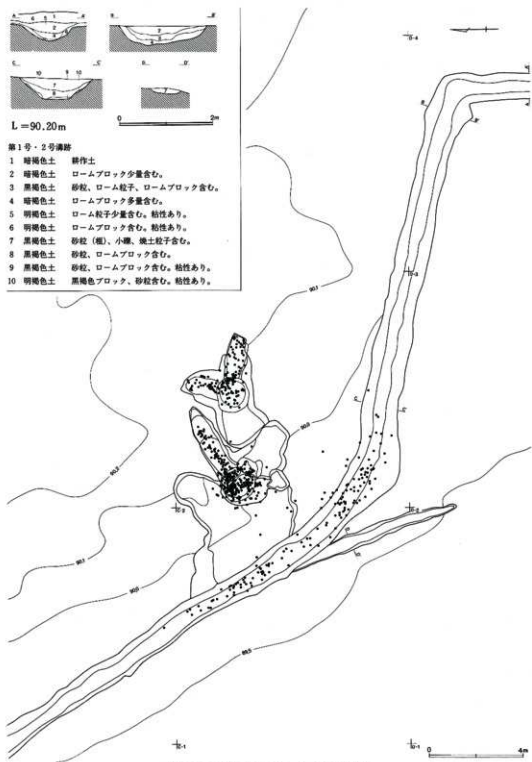
第27図 須恵器分布図



L = 90.20 m

第1号・2号溝跡

- | | |
|---------|---------------------|
| 1 暗褐色土 | 耕作土 |
| 2 暗褐色土 | ロームブロック少量含む。 |
| 3 黒褐色土 | 砂粒、ローム粒子、ロームブロック含む。 |
| 4 暗褐色土 | ロームブロック多量含む。 |
| 5 明褐色土 | ローム粒子少量含む。粘性あり。 |
| 6 明褐色土 | ロームブロック含む。粘性あり。 |
| 7 黒褐色土 | 砂粒(粗)、小礫、焼土粒子含む。 |
| 8 黒褐色土 | 砂粒、ロームブロック含む。 |
| 9 黒褐色土 | 砂粒、ロームブロック含む。粘性あり。 |
| 10 明褐色土 | 黒褐色ブロック、砂粒含む。粘性あり。 |



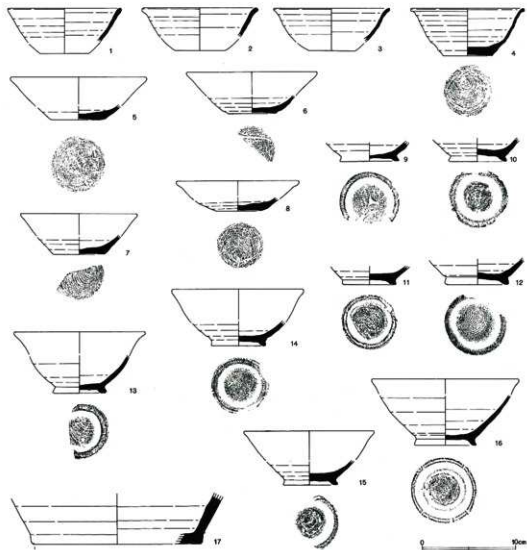
第28図 平瓦分布図と第1号・第2号溝跡

4. 第1号溝跡 (第28図)

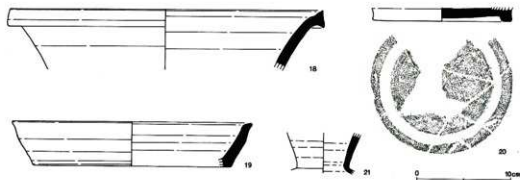
B-1~D-4 グリッドに位置し、長さ約40mが確認された。幅は1.1~2.2m、深さは35~80cmである。地形からはD-4グリッドを頂点にして南及び北西方向に傾斜する。D-4~3グリッドにかけては水の流れた痕跡が認められた。遺物は溝が大きく曲がる遺跡中央部に集中し、最下層に至るまで須恵器、瓦の破片が混入していた。

出土遺物 (第29~31図)

出土遺物は坏、高台付坏、長頸壺、甕、瓦などである。いずれも小破片が多く、風化が進んでいる。坏は窠体内のものに比べると口縁部の端部の屈曲が弱い。



第29図 第1号溝跡出土遺物(1)



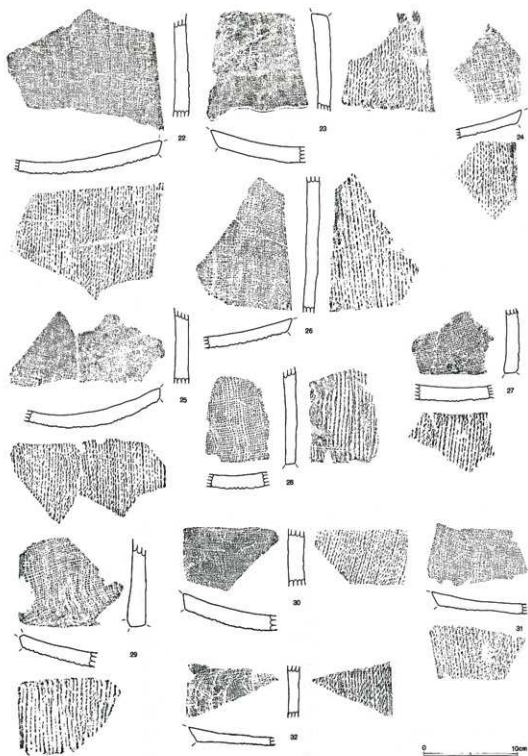
第30図 第1号溝跡出土遺物(2)

第1号溝跡遺物観察表 (第29・30図)

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	色調	残存率	出土位置・その他
1	坏	(12.2)			AC	A	灰	20	ロクロ調整、覆土。
2	坏	(12.4)			AC	B	オリブ灰	25	ロクロ調整、覆土。
3	坏	(12.4)			AC	B	灰オリブ	25	ロクロ調整、覆土。
4	坏	12.2	5.0	5.2	AC	A	オリブ灰	50	ロクロ調整、回転未切り未調整、覆土。
5	坏			5.8	AC	B	灰オリブ	30	ロクロ調整、覆土。
6	坏			(5.2)	A	B	灰オリブ	20	ロクロ調整、覆土。
7	坏			5.5	AC	B	灰	20	ロクロ調整、覆土。
8	坏			4.8	AC	A	灰	30	ロクロ調整、覆土。
9	高台付坏			(6.3)	AC	A	にぶい層	30	ロクロ調整、覆土。
10	高台付坏			6.2	AC	A	灰	30	ロクロ調整、覆土。
11	高台付坏			5.7	AC	A	灰	30	ロクロ調整、覆土。
12	高台付坏			(6.8)	AC	B	にぶい黄橙	30	ロクロ調整、覆土。
13	高台付坏			(5.7)	AC	A	暗灰	30	ロクロ調整、覆土。
14	高台付坏			(5.8)	AC	B	淡黄	30	ロクロ調整、覆土。
15	高台付坏			(5.8)	AC	A	暗灰	20	ロクロ調整、覆土。
16	高台付坏			6.6	AC I	B	暗灰黄	40	ロクロ調整、覆土。
17	壺			(18.0)	AC	A	暗灰黄	10	ロクロ調整、覆土。
18	板	(33.8)			AC		灰黄	10	風化が著しい、横ナデ。
19	盤	(25.6)			A I		にぶい黄橙	10	横ナデ。
20	長頸壺			14.8	ACE I		にぶい黄橙	70	ナデ。
21	長頸壺				AC		灰	20	ロクロ調整。

第1号溝跡遺物観察表 (第31図)

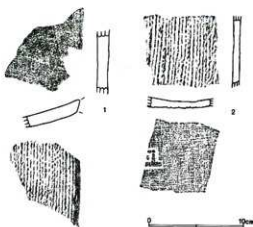
番号	器種	凹面	単位単位(寸)	凸面	技法	糸切	成形	胎土	焼成	色調	残存率	その他
22	平瓦	布目	19×18	縄印き	一枚造	なし		ACDI	A	灰	16	
23	平瓦	布目	21×21	縄印き	一枚造	なし		AC	C	にぶい黄橙	10	
24	平瓦	布目	20×17	縄印き	一枚造	なし		ACI	C	にぶい黄橙	4	
25	平瓦	布目	23×26	縄印き	一枚造	なし		ABC	B	黄灰	30	
26	平瓦	布目	21×23	縄印き	一枚造	なし		AC	B	黄灰	30	
27	平瓦	布目	22×21	縄印き	一枚造	なし		AC	B	黄灰	4	
28	平瓦	布目	23×22	縄印き	一枚造	なし		ABC I	C	黄灰	6	
29	平瓦	布目	22×24	縄印き	一枚造	なし		ABCF	C	黄灰	8	
30	平瓦	布目	18×17	縄印き	一枚造	なし		ABCF	A	暗灰黄	6	
31	平瓦	布目	10×17	縄印き	一枚造	なし		ACE A	A	灰	6	
32	平瓦	布目	23×21	縄印き	一枚造	なし		AC	A	灰	4	



第31图 第1号溝跡出土遺物(3)

5. 第2号溝跡 (第28図)

C-2、D-2グリッドに位置し、長さ約7.2mが確認された。1号溝の西側は緩やかな谷地形になっており、谷地形とはほぼ平行して南向きに延びている。幅は65cm、深さ20cmである。なお、1号溝との新旧関係については確認できなかった。



第32図 第2号溝跡出土遺物

第2号溝跡遺物観察表 (第32図)

番号	器種	凹面	着目単位(本)	凸面	技法	糸切	成形	胎土	焼成	色調	残存率	その他
1	平瓦	布目	不明	縄叩き	一枚造	なし		ACF	C	にぶい黄	4	
2	平瓦	布目	20×19	縄叩き	一枚造	なし		ABCFI	C	にぶい黄褐	4	

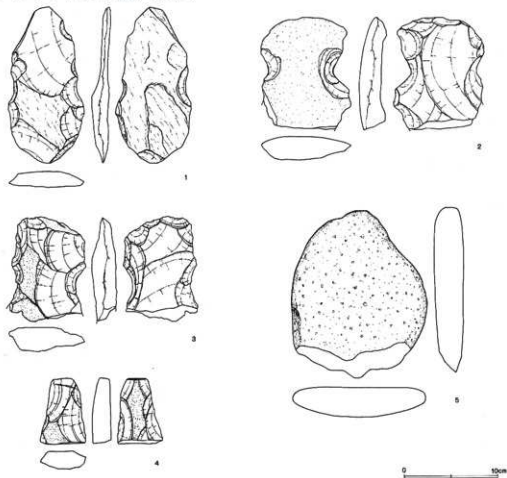
出土遺物 (第32図)

遺物は図示した平瓦2点の他、須恵器の小破片が少量出土した。1は側面、2は中央部の破片で、2は凹面に模倣文字「上」の逆字が表現されているが、「土」の先端が削られた型でつくられている。

下の写真は1号溝の調査風景である。調査区は緩やかに西側(奥)に傾斜し、桑畑の手前付近までが浅い谷地形となっている。写真後方に見える丘陵は末野窯跡群の中心部である。桜沢窯跡との距離は直線で約3kmである。



6. グリッド出土遺物 (第33図)



第33図 桜沢窯跡グリッド出土遺物

桜沢窯跡で発見された石器は図示した5点のみで、いずれも表採である。

打製石斧

1を除く3点が欠損品である。1・4は撥形、2～3は分銅形である。1は結晶片岩製で、表裏面とも周縁の剥離は極めて粗く、表面刃部は大きく2回の剥離で作り出されている。4はホルンフェルス製で中央部から刃部にかけて欠損している。風化が著しい。

同図2～3はいずれも砂岩製で、両側挟入部下端から刃部にかけて欠損している。2は、片面に自然面を残し、現存部位では、表面の挟入部にのみ剥離が加えられている。裏面は両面からの主剥離に加え、周縁部の粗い剥離によって形状を整えている。3も粗い剥離で形状を整えている。片縁の挟入がやや深い。両側挟入部にのみ敲打による刃潰し加工が認められる。

石皿

断面が凸レンズ状で、平坦面の一部に磨耗が認められる。閃緑岩の河原石をそのまま利用したもので、一部が欠損している。

V 結語

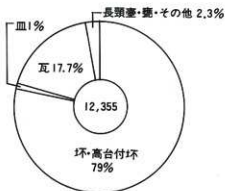
桜沢窯跡の出土遺物について

1. 器種構成

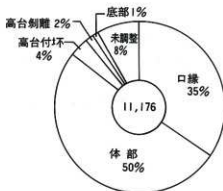
桜沢窯跡の出土遺物には、坏、高台付坏、皿、長頸瓶、長頸壺、甕、平瓦がある。出土状況から高台付坏は平瓦とともに焼台としても使用されており、平瓦は他に窯壁や天井部の補強材として活用された可能性が高い。分布図から見た出土状況は、窯体内と灰原に集中し、器種も窯体と灰原での器種構成は同様であって、窯によって特に異なった器種を焼成するものではなかったと考えられる。1号窯は、操業途中あるいは操業直後に天井部の崩落によって中断しているため全容は掴みきれないが、2号窯は出土状況から大凡の器種構成、焼成位置などを想定することが可能である。第34図は桜沢窯跡の出土遺物を器種別に比率分類したものである。なお、坏と高台付坏の口縁部の破片は、形態が類似しており、分類上の誤認を招かないために合わせて掲載した。

出土遺物の総点数は12355点である。このうち瓦を除いた須恵器の総点数は11176点である。遺物全体に占める器種別比率では、坏と高台付坏が出土遺物の79%、須恵器全体でも9割近い占有率を示す。1号窯と2号窯では遺物出土量に差があるが、各々にみられる器種別占有率は、比率において微妙に異なるが、ほぼ同一傾向とみて大過ないであろう。出土遺物の主体を占める坏類は、平底の底部回転糸切り未調整と高台付の二種類である。形態的には糸切り離しの坏は、高台付坏に比べてやや小型で、口縁部が直線的なタイプと外反するタイプに分類できる。底径は5.5cm未満が全体の72%を占め、6cmを超えるものは5%未満である。これに対して高台付坏は、6cm以上が全体の73%を占め、坏との量差が明確に打ち出されている。しかし、口径については13cm代の製品も多くみられることや底径が5.5cmを超える坏で口縁部が外反するタイプの口径とも一致することから、いわゆる高台付碗が消滅した後に坏に高台を付着したタイプがこの時期とすることができる。高台は比較的厚く、短い。また、内傾したものが多く、坏部との接合は補足の粘土で接いだり、坏部に刻みを入れ、内外面を簡単に撫でて仕上げている。高台だけの剝離が2%に及んでいるのはこの為と考えられる。皿は底径が坏と殆ど同じ大きさで、厚く、一部には回転糸切り後に再び底部に粘土を足して、回転糸切り調整をするものがある。口縁部の外反するタイプと直線的なタイプがあり、外反するタイプは始め薄く、端部を厚くつくるのを特徴とし、体部の湾曲する形態と関連性がある。壺は広口が中心で、底部などに灰釉陶器の影響が窺われる。甕は口縁部が大きく開き、胴部中央に最大径がある。皿・壺・甕類は1号窯、2号窯とも合わせて3~4%の占有率で、相対量は少ないとみられる。瓦については2号窯に比べて1号窯における平瓦の占有率は高いが、窯体内の遺物の残存状況からみると、1号窯は遺物がある程度散逸しておりその比率はほぼ同じと考えられる。平瓦の総点数は枚数に換算すると、約13枚に相当し、須恵器と同様な分布傾向を示すため、製品としての可能性も考えられたが、出土状況から焼台や補強材であったとみるのが自然と考えられる。

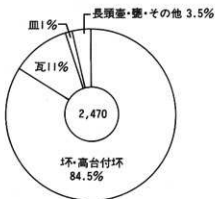
桜沢窯跡では出土遺物から、坏・高台付坏・皿を中心に生産が行われ、壺、甕などが合わせて焼成されたものと考えられる。焼台に使用されていた高台付坏は、量的に多く、生産されたものの一



出土遺物総点数



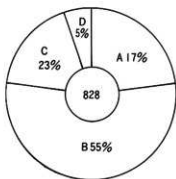
須臾器破片総数



SF-1 器種別比率

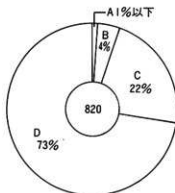


SF-2 器種別比率



回転糸切り未調整

底 径
 A 5cm未満
 B 5.1～5.5cm
 C 5.6～6cm
 D 6.1cm以上



高台付環

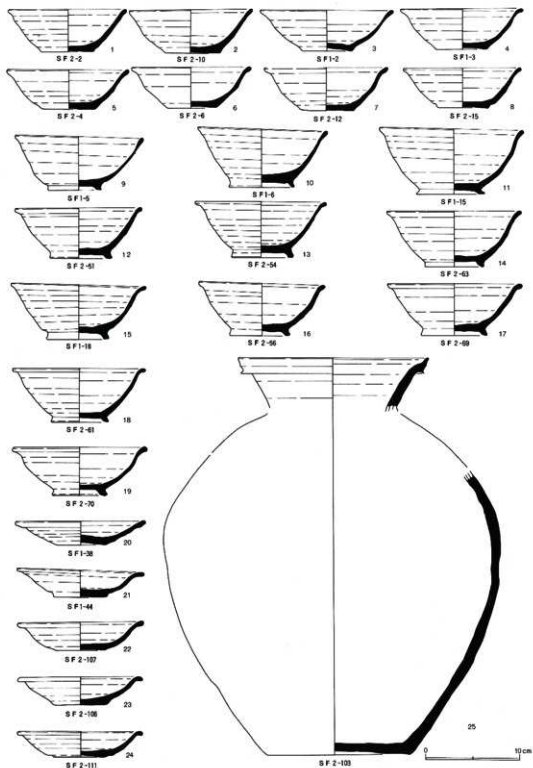
第34図 器種別比率

部も焼台に充てられたものと考えたい。

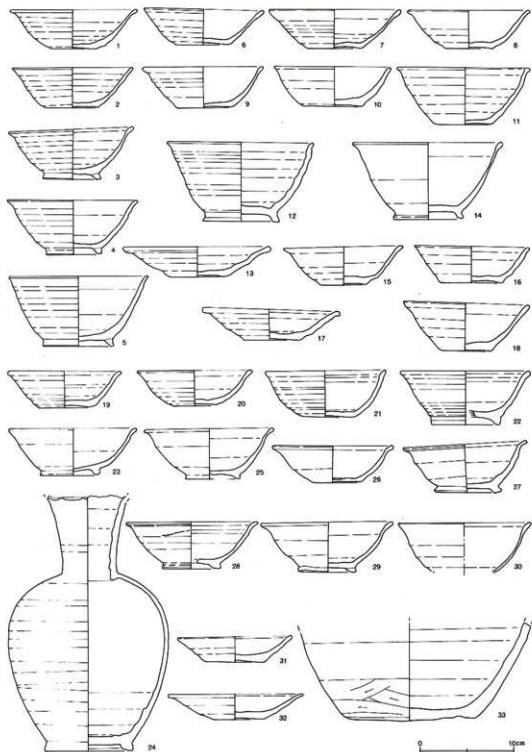
2. 出土土器について

桜沢窯跡を含めた末野窯跡群の編年研究は、県立歴史資料館によって行われた県内の窯業遺跡の調査によってある程度生産地と消費地における特色や分布の傾向が明らかになってきた。しかし、須恵器生産の衰退する10世紀以降や操業の開始年代などは、以前として不明瞭な点が残り、今後の課題となった。ここでは、寄居周辺の窯や集落出土須恵器を中心に、10世紀前後の土器生産について考えてみたいと思う。

桜沢窯跡の須恵器は前述したように、坏と高台付が中心である。製作技法や形態には大きく分けて、直線的に開くタイプと体部が膨らみ、口縁部の外反するタイプの二種類がある。端部はともに玉縁状に肥厚し、前者は底部が厚く、後者は均一的な傾向がある。量的には後者が多く、坏でも高台を付着すれば高台付坏と区別のつかない坏も存在する。(SF1-4、SF2-21、22、27、29) また、一方、高台を外せば坏としても差し支えない高台付坏も存在する。(SF1-18、SF2-51、54、56) 周辺の遺跡では、台耕地遺跡78号住居跡例(第36図27~29)、西浦北遺跡4号住居跡例(第36図23)、折原窯跡例(第36図1・3)などは該期の良好な比較資料である。このような高台付坏は、前代からの高台付碗の系譜ではなく、坏の形態変化の中で新たな碗形態を求めたためと考えられる。末野周辺の碗(無台、高台付)の系譜については、9世紀末頃には消滅しており、南比企窯跡群や東金子窯跡群と同様な変化を辿っている。伴六遺跡12号住居跡(第36図19~22)は、桜沢窯跡や台耕地遺跡よりやや古く考えられる例であるが、形態的に継続性が窺われる。21の坏は深身で、体部が膨らむ碗形態を呈するが、口径は12cmと他の坏と法量的に変わらない。これに対して、22の高台付坏は体部中央でやや膨らむが、直線的に開き、端部が僅かに外反する。22だけに注目すると、一見桜沢窯跡などより新しい様相に見受けられるが、他の遺物との相伴関係を考慮すると、過渡期的な産物と理解することも可能である。坏は9世紀後半~末頃に底径は縮小化が進むが、その後体部が直線的に開く逆台形と体部中央が膨らむタイプが混在するようになり、底径はやや変化に富む傾向が現われる。また、口唇部の外反する度合いは時期が新しくなるにつれて大きくなり、坏の主体は体部中央が膨らみ、口唇が外反するタイプへと移行する。新開窯跡(第36図6~8)は桜沢窯跡や台耕地遺跡などの例に比べて若干年代的に新しいが、形態的な変化の継続性が窺われる。また、荒川を挟んで桜沢窯跡の対岸に位置する折原窯跡には、新久D-1号窯(第36図6~8)や同D-3号窯などにみられる深身の碗が存在する。他の相伴遺物との組合せを考えると、やや新しい時期の要素とすることができる。皿は坏と同様に底径の縮小化が進み、体部が直線的に開くタイプと体部が緩やかに膨らみ、口唇が大きく外反するタイプがある。口径はともに13~14cm、器高は3cm前後のものが中心である。底部は無高台が多いが、沼下遺跡7号住居跡では無高台に混じって高台付もみられる。また、口唇部の形態については、無台及び高台付に限らず端部が肥厚する傾向があり、特に外反するタイプに顕著に表れている。壺類には灰袖陶器の影響がみられる。桜沢窯跡に近接する台耕地遺跡77号住居跡からは、K-90号窯式の灰袖陶器が出土しており、在地産の壺類の高台が低く押さえられたりするのはその影響の一つと考えられる。甕類は絶対量が少ないが、やや小型化し、胴部外面の叩きは殆ど消滅し、内面の当て具は撫でによって消される場合が多い。また、底部は篋削りされ、



第35图 桜沢窟跡出土遺物



1~5 折原竈跡、6~8 新聞竈跡、9~13 新久竈跡D-1号竈、14~18 新久竈跡D-3号竈、19~22 伴六遺跡第12号住居跡、23~25 西浦北遺跡第4号住居跡、26~33 台耕地遺跡第78号住居跡

第36図 主な竈跡・集落出土遺物

台耕地遺跡78号住居跡（第36図33）のように胴部下端に及ぶ場合もある。

以上のように、桜沢窯跡の土器群は他の窯跡や遺跡と同様に形態的变化を示す反面、高台付坏に代表されるように恒常的に生産されてきた坏に高台を付着し、碗の形態を作り出すという新たな土器生産の形が打ち出されている。既に在地産の須恵器には灰釉陶器等の影響がみられ、それらが新しい土器を生む要因の一つと考えられる。また、桜沢窯跡のように平坦な段丘面に窯が構築されるという行為は、古代的土器生産が崩壊して生産体制の分散化が促されていった結果といえよう。しかし、一方では、折原窯跡のように丘陵の斜面に窯が構築されて生産が行われる場合もあり、過渡期的な様相をも垣間見ることができる。また、土器生産の分散化は、古代の流通形態から中世的な流通形態への移行を促すもので、台耕地遺跡のような製鉄などに関連した集落もそうした流通の中に組み込まれた集落の一つと考えられる。

桜沢窯跡の年代については第36図に示した土器群から10世紀第1四半期と考えたい。桜沢窯跡と同時期と考えられるものには、台耕地遺跡78号住居跡や西浦北遺跡4号住居跡などがあるが、西浦北遺跡4号住居跡からはK-90号窯式の灰釉陶器が出土している。一方、台耕地遺跡78号住居跡に先行する同77号住居跡からも上記の灰釉陶器が出土し、集落によって灰釉陶器は年代的に異った出現をする。K-90号窯式には年代に幅があるようであり、出土例からは9世紀第四半期～10世紀前半に集中する傾向がある。また、新開窯跡の出土遺物については従来10世紀後半と考えられてきたが、図中に示した土器群の範疇で理解できることから10世紀前半、折原窯跡については、桜沢窯跡とほぼ同時期と考えられる。

3. 文字瓦「上」の逆字について

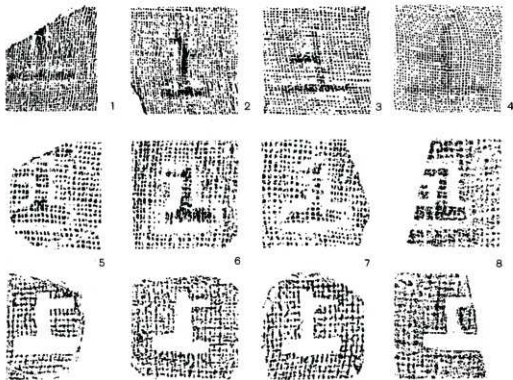
桜沢窯跡から出土した文字瓦は、1号窯3点、2号窯5点、2号溝1点の合計9点である。いずれも平瓦凹面中央部に模骨されたもので、「上」の文字が逆字となって「丄」となったと考えられる。文字瓦には郡、郷、人名などがあり、出土地点や地域によってその記名方法・内容は様々である。本稿では、桜沢窯跡から出土した文字瓦を中心にその特色や生産体制、同時期と見られる武蔵国分寺塔再建期の文字瓦との関連性などについて触れてみたい。

出土した平瓦は、製作技法上、粘土板である粘土紐であるかは問題として残るが、ともに積極的に推せる根拠に乏しい。平瓦の多くは小破片で、その上風化が著しく、糸切りなどの調整前の痕跡は確認できないのが現状である。しかし、破片の中に横方向に対する割れや罅が入る瓦があることから、粘土紐による一枚造りの可能性が高いことを指摘しておきたい。瓦の側面や端面は、中心部分に比べて厚く造られる傾向があり、凹面には布目、凸面には縄叩きが施されるが、凸面の縄叩きは比較的深くたたき込まれているものが多い。これは製作時において、粘土の乾燥が差程進行しない段階において叩かれた可能性を示すもので、中心部を叩き締めることによって粘土は側面や端部方向に押し出され、厚くなったものと考えられる。また、「上」の逆字は前記したように凹面中央部寄りに表わされるが、出土した9点はいずれも布目との凹凸が浅い。したがって、製作台上に握り込まれた文字瓦「上」の逆字は、握り込みが浅く、ある程度強く叩かれない限り凹面の布目には表れないことが予想できる。以上のことから側面や端部の厚みは、模骨文字「上」を凹面上に浮き上がらせた結果に起因している可能性が高い。

「上」は、第37図の武蔵国分寺例から「上」の逆字であると考えられる。第37図5～8の下段は各々の型を復元したものである。拓影図や復元型の5と8を比べると異なった型で製作されていることが確認でき、二種類以上の製作台によって生産されていた可能性がある。5～7は微妙に異なっているが、型の深さを考慮すると同一の型である可能性の方が高い。8は明らかに文字の先端が切れており、前者とは異なった型である。武蔵国分寺例をみると、「上」の正字とともに逆字（第37図3・4）の存在が確認できる。桜沢例は文字の浮き上がっている部分に高さがいないため、文字の周辺の布目を意識的に表現せず、文字のみを誇張するように拓影したため、やや違和感があるが、字体は国分寺例に基本的には類似している。現在のところ、埼玉県内では「上」の逆字の平瓦が出土する遺跡は桜沢窟跡以外では確認されていないが、胎土は寄居周辺の地域でみられるものと類似しており、末野の窟跡群で焼成された可能性もある。これに対し、武蔵国分寺出土瓦の胎土は粒子の細かさや含まれる鉱物から南多摩や東金子地域に近く、色調も灰～黒褐色が主体である。また、「上」の文字の大きさは桜沢例は縦横とも2.2cm前後であるが、国分寺例は縦横3.3cm前後と約5割も大型であり、字体も桜沢例が丸味があるのに対して、国分寺例はやや直線的である。このように胎土や焼成において桜沢例と国分寺例は異なった様相を示しており、所見からは生産地の共通性は認められない。

武蔵国分寺から出土する逆字の瓦は「上」、「加上」「見」、「男」、「棒」、「壘」などがあり、いずれも郡名を表わすものと考えられている。国分寺出土の文字瓦（匱書きを除く）に占める逆字の割合は一割弱であるが、仮に郡名を表わすものとするとき現在の県北地域の名称が多い。武蔵北部に逆字が多い理由は明らかではないが、一つの可能性として瓦工人の特徴が考えられる。国分寺の文字瓦は創建以降、南比企窟跡群、東金子窟跡群、南多摩窟跡群などの大規模な生産地で伽藍の修復に伴う差し替えなどに応じて焼成されたものとされている。上記の文字瓦についても各窟跡群で焼成された可能性を残すが、社会環境の変化などによって生産地点が分散し、主要生産地から離れた地域での生産の可能性が考えられる場合は、逆字などの不備が生まれることも否定できない。

武蔵国分寺の塔再建以降の瓦生産については、不明瞭な点が多い。それは塔再建期を境にして瓦当文様の退化、生産の減少が急激に進むが、寺の区画満の埋まる廃絶期との間に土器群との時間的な差が生ずる。その時間的な差が差し替え瓦などの補修で充てられたとしても廃絶期の瓦が存在しないことを考えると、国分寺関係瓦生産の殆どは既に9世紀代で終了したものとみられる。塔再建期以降、瓦が減少するのは、官窯であった南比企窟跡群、東金子窟跡群、南多摩窟跡群の衰退と寺院経営の縮小、寺院形態の転換化が大きな原因ではないかとみられる。桜沢窟跡や新開窟跡などのように二次的に後世に瓦が利用される例は少なくないが、塔再建期後に続く瓦の生産体制は明らかではない。県内でも古代的瓦の終末と考えられる新開窟跡出土瓦は、前述した須恵器や八坂前窟跡で出土する「大」の文字瓦の年代から9世紀後半～末頃とみられ、武蔵国内での瓦生産は、10世紀に入る頃には終焉をむかえていたものと考えられる。



第37図 文字瓦「上」 1～4 武藏国分寺・5～8 桜沢窟跡

引用・参考文献

市川 修 (1977) 『田中前遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告書 第32集
 今関 久夫他 (1993) 『大里郡城の遺跡Ⅱ』 『埼玉考古』 第30号 埼玉考古学会
 上原 真人 (1989) 『東国国分寺の文字瓦再考』 『古代文化』 12月号 (財) 古代学協会
 梅沢太久夫他 (1979) 『末野窟跡群および馬騎の内庭寺の調査』 町史編さん調査報告 第4集 寄居町教育委員会
 大塚 孝司 (1984) 『江ヶ崎貝塚・荒川附遺跡』 蓮田市教育委員会
 荻野 繁春他 (1981) 『老洞古窟跡群発掘調査報告書』 岐阜市教育委員会
 木津 博明 (1990) 『国分境遺跡』 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告 第104集
 木津 博明 (1992) 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(8)』 (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告 第132集
 小淵 良樹他 (1982) 『宮ノ越遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告書 第44集
 埼玉県 (1984) 『新編埼玉県史・資料編3』 古代1 奈良・平安
 斎藤 忠他 (1989) 『静岡県発掘遺跡』 静岡県文化財調査報告書 第42集
 酒井 清治 (1984) 『台耕地Ⅱ』 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第33集
 酒井 清治 (1987) 『埼玉県の須恵器の変遷について』 『埼玉の古代窯業調査報告書』 埼玉県立歴史資料館
 酒井 清治 (1987) 『武蔵国における須恵器年代の再検討』 『研究紀要』 第9号 埼玉県立歴史資料館

- 坂詰 秀一編 (1984) 『武蔵八坂前窟跡』 雄山閣出版
- 篠原 祐一 (1993) 『広表窟跡 付欠ノ下遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告書 第131集
- 須田 茂 (1992) 『黒熊中西遺跡(1)』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告 第135集
- 高木 義和他 (1977) 『末野窟跡(花園支群)発掘調査』文化財報告 第2集 寄居町教育委員会大塚 孝司
(1984) 『江ヶ崎貝塚・荒川附遺跡』 蓮田市教育委員会
- 高橋 一夫他 (1982) 『埼玉県古代寺院跡調査報告書』 埼玉県史編さん室
- 高橋 一夫 (1984) 『正龍寺窟跡』『寄居町史』原始古代中世資料編 寄居町教育委員会
- 田辺 昭三他 (1984) 『窯業』講座・日本技術の社会史 第四巻
- 谷井 彪他 (1987) 『埼玉の古代窯業調査報告書』 埼玉県立歴史資料館
- 中沢 悟 (1981) 『清里・陣馬遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 中村 浩他 (1990) 『社・吉馬』 吉馬古窟跡群埋蔵文化財調査会
- 服部 敬史・福田 健司 (1979) 『南多摩窟跡群出土の須恵器とその編年』『神奈川考古』第6号 神奈川考古
同人会
- 服部 敬史・福田 健司 (1981) 『南多摩窟跡群における須恵器編年再考』『神奈川考古』第12号 神奈川考古
同人会
- 服部 敬史 (1981) 『南多摩窟跡群 御殿山地区62号窟跡発掘調査報告書 八王子バイパス樋水遺跡調査会』
- 服部 敬史 (1982) 『南武蔵における古代末期の土器様相』『東京考古』1 東京考古談話会同人
- 服部 実喜 (1988) 『関東地方における平安時代後期の土器様相 一主として関東地方西部地域の動向について』『神奈川考古』第24号 神奈川考古同人会
- 昼間 孝志他 (1986) 『北武蔵における古瓦の基礎的研究Ⅰ』『研究紀要』1986 (財)埼玉県埋蔵文化財調査
事業団
- 福田 健司 (1986) 『南武蔵における平安時代後期の土器群』『シンポジウム古代末期～中世における在地系
土器の諸問題』神奈川考古同人会
- 松本 富雄他 (1981) 『新聞遺跡Ⅰ』 三芳町教育委員会
- 松本 富雄他 (1982) 『新聞遺跡Ⅱ』 三芳町教育委員会
- 宮 昌之他 (1988) 『北武蔵における古瓦の基礎的研究Ⅱ』『研究紀要』第4号 (財)埼玉県埋蔵文化財調
査事業団
- 大和 修他 (1982) 『沼下・平原・新堀・中山・お金塚・中井丘・鶴巻・水久保・結久保遺跡』 (財)埼玉
県埋蔵文化財調査事業団報告書 第16集
- 吉田 章一郎 (1954) 『埼玉県大里郡寄居町末野の窟跡調査』『考古学雑誌』40巻1号
- 吉田 章一郎 (1955) 『埼玉県末野町良田窟跡』日本考古学年報7
- 渡辺 一他 (1988) 『鳩山窟跡群Ⅰ一窟跡編(1)一』 鳩山窟跡群遺跡調査会 鳩山町教育委員会
- 渡辺 一他 (1990) 『鳩山窟跡群Ⅱ一窟跡編(2)一』 鳩山窟跡群遺跡調査会 鳩山町教育委員会
- 綿貫 邦男 (1992) 『群馬県における歴史時代の土器について』『群馬考古学手帳』vol3 群馬土器観会
- 綿貫 邦男他 (1992) 『群馬県における灰釉陶器の様相について』『研究紀要』9 (財)群馬県埋蔵文化財調
査事業団

附編

桜沢窯跡出土土器の胎土分析について

X線回析試験及び電子顕微鏡観察

1 実験条件

a 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示すとおりである。X線回析試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\text{m/m}$ の試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

b X線回析試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回析試験によった。測定には日本電子製 J D X-8020 X線回析装置を用い、次の実験条件で実験した。Target:Cu, Filter: Ni, Voltage:40Kv, Current:30mA, ステップ角度:0.02°

計数時間:0.5 E S C。

c 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の度合いについての観察は電子顕微鏡によって行った。観察には日本電子製 T-20を用い、倍率は35、350、750、1500、5000の5段階で行い、写真を撮影した。

35~350倍は胎土の組織、750~5000倍は粘土鉱物及び鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

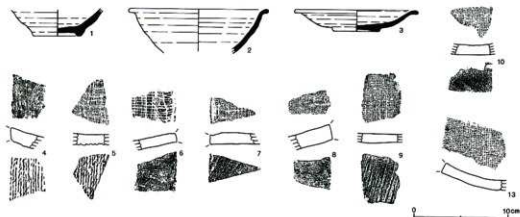
2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回析試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

ムライト (Mullite) は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト (Cristobalite) はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回析試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI~Vの5段階に区分した。

a 焼成ランク I: ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発砲している。



第38図 分析資料(1) 1-5 桜沢窯跡・6-10中堀遺跡・13吉野廃寺

- b 焼成ランクⅡ：ムライトとクリストバーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。
- c 焼成ランクⅢ：ガラスのなかにクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。
- d 焼成ランクⅣ：ガラスのみが生成し、原土（素地土）の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。
- e 焼成ランクⅤ：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

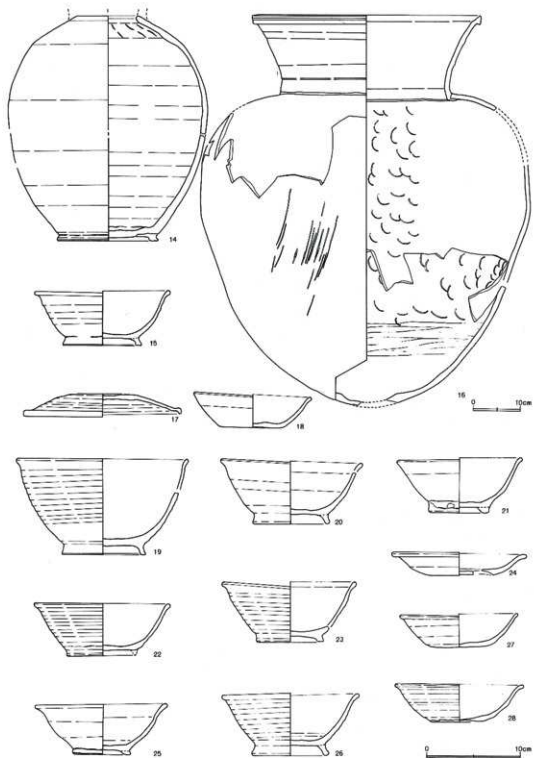
以上のⅠ～Ⅴの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

3 分析結果

a タイプ分類

第1表胎土性状表に示すように、桜沢窯跡、中堀遺跡、吉野廃寺、台耕地遺跡から出土した土器と平瓦及び、末野と箱石遺跡の粘土を合わせ分析した。第1表タイプ分類一覧表に示すようにA～Hの8タイプに分類された。最も多いタイプはBタイプで14個、次いで、Dタイプの10個、Hタイプの9個となり、これら3タイプで全体の80%を占める。

電子顕微鏡によるガラスの分析では、粗粒のガラスが生成した焼成ランクⅠ～Ⅱに該当するのは桜沢窯跡—2、4、9、10、15の5個で、他は中粒のガラスで構成される焼成ランクⅡとⅢが多い。



第39圖 分析資料(2) 台耕地遺跡

- Aタイプ：Hb,Chの2成分を含み、Mont,Micaの2成分に欠ける。固体数は1個と少ない
- Bタイプ：Hb1成分を含み、Mont,Mica,Chの3成分に欠ける。固体数は14個ともっとも多く、
桜沢窯跡と台耕地遺跡の土器と平瓦が半々で構成され、両遺跡の間の関連性が伺われる。
- Cタイプ：Mica,Hbの2成分を含み、Mont,Chの2成分に欠ける。固体数は3個と少ない。
- Dタイプ：Mica,Hbの2成分を含み、Mont,Chの2成分に欠ける。固体数は10個で、台耕地遺跡の土器が8個、桜沢窯跡の土器と平瓦が2個で、全体として台耕地遺跡の土器が主体となるCタイプとは組成的に類似するが強度が異なるために位置が異なり、タイプ分類が違っている。
- Eタイプ：Mica1成分を含み、Mont,Hb,Chの3成分に欠ける。固体数は2個と少ない。
- Fタイプ：Mont1成分を含み、Mica,Hb,Chの3成分に欠ける。末野遺跡の粘土だけである。
- Gタイプ：Mont,Hbの2成分を含み、Mica,Chの2成分に欠ける。箱石遺跡の粘土だけである。
- Hタイプ：Mont,Mica,Hb,Chの4成分に欠ける。固体数は9個で、中堀遺跡の平瓦を主体とし、
桜沢窯跡の土器3個が共存する。

以上に結果から明らかな様に、桜沢窯跡の土器と平瓦はBとHの2タイプを主体とし、中堀遺跡の平瓦はHタイプで構成され、台耕地遺跡の土器はB、C、Dの3タイプの胎土で構成され、胎土の組成としては桜沢窯跡の胎土との類似性が高い。

b 石英 (Qt) - 斜長石 (Pl) の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器製作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地における砂は各々固有の石英と斜長石の比を有していると言える。

この固有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは各々の集団の有する固有の技術の一端と考えられる。

第40図Qt-Pl相関図に示すように、土器と平瓦はI-VIのグループと“その他”に分類された。

Iグループ：桜沢窯跡の土器と平瓦8個が集中し、共存する。胎土はBとHの2タイプで構成される。吉野庵寺の平瓦が混在する。

IIグループ：桜沢窯跡の土器と平瓦5個が集中し、胎土はBとDの2タイプで構成される。

IIIグループ：中堀遺跡の平瓦が集中するグループで、胎土はHタイプだけである。

IVグループ：台耕地遺跡の土器で構成されるグループで、胎土はDタイプが主体となる。

Vグループ：台耕地遺跡の土器で構成されるグループで、胎土はDタイプを主体とする。

VIグループ：台耕地遺跡の高台付坏で構成される。固体数は2個と少ない。

“その他”：桜沢窯跡-3は石英と斜長石の強度が低く異質。

以上の結果から明らかな様に、ⅠとⅡグループには桜沢窯跡の須恵器と平瓦が共存してグループを形成する。Ⅲグループには中掘遺跡の平瓦が集中する。Ⅳグループには台耕地遺跡の土器が集中する。このように各遺跡の須恵器あるいは平瓦は同じ遺跡の須恵器と平瓦でグループを形成し、明らかに遺跡毎に分類される。台耕地遺跡の土器は分散傾向が強く、幾つかのタイプが混在しているのではなかろうか。

4 化学分析結果

化学分析は日本電子製エネルギー分散型X線分析装置（EDS）2001型和電子顕微鏡5300LV型で行った。実験条件は加速電圧：15KV、倍率：200倍、分析元素：10成分、分析時間：100秒、分析法はスプリント法で行った。この分析結果に基づいて第40図SiO₂-Al₂O₃図、第40図SiO₂-Fe₂O₃図を作成した。

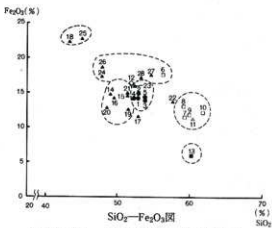
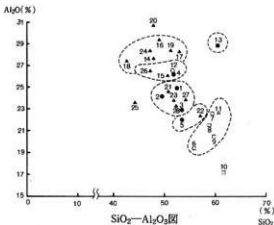
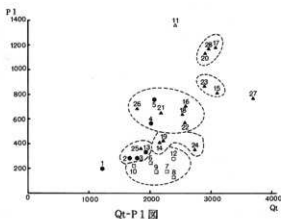
a SiO₂とAl₂O₃の相関について

第40図で明らかな様に須恵器と平瓦はⅠ～Ⅳの6グループと“その他”に分類された。

Ⅰグループ：桜沢窯跡の土器と台耕地の須恵器3個で構成され、胎土はDタイプが主体である。

Ⅱグループ：台耕地遺跡の須恵器7個で構成され、胎土はBタイプを主体としDタイプと共存する。

Ⅲグループ：桜沢窯跡の土器と平瓦と台耕地遺跡の土器が混在し、胎土は統一性がない。



第40図 Qt-P1-SiO₂-Al₂O₃・SiO₂-Fe₂O₃図

Ⅳグループ：桜沢窯跡の須恵器と平瓦3個、台耕地遺跡の須恵器4個が共存し、胎土はBとDタイプで構成される。

Ⅴグループ：桜沢窯跡の須恵器と平瓦8個が集中し、台耕地遺跡の須恵器2個が共存する。桜沢窯跡の胎土はBとHの2タイプ、台耕地の土器の胎土はDタイプで構成される。

Ⅵグループ：中堀遺跡の平瓦が集中するグループで、胎土はHタイプである。

”その他”：台耕地—12、16、中堀—20、吉野廃寺—21の4個で、とくに吉野廃寺—21は異質である。

以上の結果から明らかな様に、Ⅴグループは桜沢窯跡、Ⅱグループは台耕地遺跡、Ⅵグループは中堀遺跡というように遺跡毎に集中している。台耕地遺跡の須恵器は全体に分散傾向が強い。吉野廃寺の平瓦はこれらのグループとは離れており、異質である。

b SiO₂とFe₂O₃の相関について

第40図に明らかな様に、須恵器と平瓦はⅠ～Ⅴの5グループと”その他”に分類された。

Ⅰグループ：桜沢窯跡の土器2個と台耕地遺跡の土器2個で構成される。胎土はBとDの2タイプで構成される。

Ⅱグループ：桜沢窯跡の須恵器と平瓦3個、台耕地の土器5個で構成される。桜沢窯跡の胎土はBタイプ、台耕地遺跡の土器はDタイプで構成される。

Ⅲグループ：台耕地遺跡の土器8個が集中するグループ。胎土はBタイプを主体とする。

Ⅳグループ：桜沢窯跡の土器と平瓦10個が集中し、台耕地遺跡の土器3個が共存する。桜沢窯跡の胎土はHタイプを主体とし、Bタイプと共存する。台耕地遺跡の胎土はDタイプで統一する。

Ⅴグループ：中堀遺跡の平瓦が集中するグループで、胎土はHタイプである。

”その他”：中堀—16と吉野廃寺—21の2個で、特に吉野廃寺の平瓦はどのグループとも離れ異質である。

以上の結果から明らかな様に、ⅡとⅢグループは台耕地遺跡の須恵器、Ⅳグループには桜沢窯跡の須恵器と平瓦、Ⅴグループには中堀遺跡の平瓦というように各グループ毎に集中して分布し、明らかに各遺跡の須恵器と平瓦は異なるものと判断される。

5 まとめ

1) 須恵器と平瓦の胎土はA～Hの8タイプに分類されたが、B、D、Hの3タイプで全体の80%を占める。Bタイプは桜沢窯跡の土器と平瓦が主体となり、台耕地遺跡の土器の一部もこのタイプに含まれる。CタイプとDタイプは組成的に類似するもので、これらは台耕地遺跡の須恵器が集中し、台耕地を代表するものである。中堀遺跡の平瓦全部がHタイプで、中堀を代表するものではないか。桜沢窯跡の土器の一部はこのタイプで構成される。桜沢窯跡における須恵器と平瓦において、胎土が異なるということはなく、同じタイプの胎土を両者がつかっている。

試料No	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物										備考	時期	
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch,Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Qt	Pl	Crist	Mullite	K-fels	Halloy	Kaol			
桜沢-1	H	Ⅱ	14	20				1221	200	302	41					高台付坏	10C E
桜沢-2	B	Ⅱ	5	20			66	1685	289	144						坏	10C E
桜沢-3	H	Ⅰ-Ⅱ	14	20				1783	283	128						皿	10C E
桜沢-4	D	Ⅲ	7	20			181	150	2020	560	89					平瓦	9~10C E
桜沢-5	B	Ⅲ	5	20				179	2065	760	148					平瓦	9~10C E
中塚-6	H		14	20					1999	240	119					平瓦	9C L
中塚-7	H		14	20					2271	178	367	62				平瓦	9C L
中塚-8	H		14	20					2358	116	341	100				平瓦	9C L
中塚-9	H		4	20					2089	168	184	48				平瓦	9C L
中塚-10	H		14	20					1713	219	192	56	208			平瓦	9C L
末野(粘土)-11	F		11	20	434				2413	1356						84	
箱石(粘土)-12	G		12	14	202			100	2400	279				96			
吉野庵寺-13	E		8	20			113		1931	330	133					平瓦	9C L
台耕地-14	B		5					138	2151	409	93					壺	9C L
台耕地-15	E		8				111		3104	815	291					高台付坏	9C L
台耕地-16	B		5					95	2581	701	145					羹	9C L
台耕地-17	D		7				134	61	3089	1183	137					羹	9C L
台耕地-18	D		7				167	157	2527	628						坏	9C L
台耕地-19	B		5					68	2197	425	144					輪	10C E
台耕地-20	B		5					95	2897	1130	130					高台付坏	9C L
台耕地-21	C		6				70	131	2175	645						高台付坏	10C L
台耕地-22	D		7				167	144	2577	554	102					高台付坏	10C E
台耕地-23	B		5					57	2891	865	95					高台付坏	10C E
台耕地-24	D		7				118	61	2699	388	135		162			皿	10C E
台耕地-25	B		5					101	1852	361	117					高台付坏	10C M
台耕地-26	C		6				66	94	1779	681	92					高台付坏	9C L
台耕地-27	D		7				138	79	3691	761	89					坏	9C L
台耕地-28	D		7				211	177	2960	11760	114					坏	10C E

第1表 桜沢窯跡胎土性状表

2) 石英 (QT) と斜長石 (P1) の相関では、I と II の 2 グループに桜沢窯跡の須恵器と平瓦が共存して集中し、胎土のタイプ分類の傾向と同じである。III グループには中堀遺跡の平瓦が集中する。IV グループには台耕地遺跡の須恵器が集中する。台耕地遺跡の須恵器は分散傾向にあり、幾つかのタイプが混在しているのではなかろうか。このように各遺跡の土器と平瓦は遺跡毎に明瞭に別れ、各々が異なるタイプであると判断される。

3) 化学分析結果でも桜沢窯跡の須恵器と平瓦、台耕地遺跡の須恵器、中堀遺跡の平瓦は各々異なるグループを形成し、石英と斜長石の相関と同じ結果を呈している。吉野廃寺の平瓦は化学分析では明らかに異質であり、桜沢窯跡と中堀遺跡の平瓦とは関連性がないように見受けられる。

4) 末野遺跡と箱石遺跡の粘土は組成的に異質で直接桜沢窯跡と中堀、台耕地遺跡の須恵器と平瓦とは関連しない。

(株) 第四紀地質研究所 井上 巖